
ヤンでれ...

XXXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンでれ…

【Nコード】

N8482K

【作者名】

XXXXX

【あらすじ】

家族思いでやさしい普通の男子高校生桐ヶ谷^{きりがやし}将^{しょう}に恋をし、病んでいる同じクラスの義妹、完璧大和撫子の宮代^{みやしろ} 静香^{しずか}そんな静香の愛が巻き起こす事件の数々…
アドバイス、感想があったらぜひお願いします。

尚私は全て書き終わってから見直すので、完結した場合は見直して話数を調整したいと思います。御了承ください

表紙、挿絵書いてくれる人大募集！ もう確実に執筆スピード早くなりませぬ。「キリッ」もしいたらメールか感想お願いします！

ヤンでれ・・・上(前書き)

友達に言われ、ヤンデレを書いてみることにしました。駄文ですが、読んでもらえれば幸いです。

ヤンでれ・・・上

「…兄…きて」

「ん〜、あと3分……」

誰かが体を揺さぶって起こそうとしているのがわかる、しかし体が眠いせいか、寝ぼけている桐ヶ谷^{きりがやま} 将の脳は睡眠を優先させ、拒否の反応を示していた。

「起きてく……い」

おかしい。

将は寝かけていた頭をできるだけ早く回転させた。何かがおかしいのだ、そう、いつもとは何かが違うっていた。何が違うのかははっきりとしないが、何かが違う。

眠い頭で考えているうちに頭がだんだん覚めていき、そしてあることに気づいた。

声が違う

いつも自分を起こしているのは弟のはず、なのに、今自分を起こしているのは透き通るソプラノのような声、つまり女の声。そこまですぐと将の目は完全に覚め、目を開けた。

するとびっくり、目の前にはとんでもない美少女の顔があり、徐々に近づいてきている。

「うわあああ！」

将は大声をあげると、ベッドの布団から飛び出し、背中が壁に付くまで全力で後退した。

「ななな、なにやってるんだよ静香！」

目の前で四つん這いになって迫ってきた彼女の名は、宮代 静香
みみやしろ しずか、とんでもない美少女で、容姿は腰まで伸び
ている漆黒の黒髪、小さい人形のような愛らしい顔、完璧すぎるプ
ロポーション、雪のように白い肌、現代ではありえないほどの大和
撫子だ、しかも成績は常に満点、スポーツ、武術などもでき、もは
や弱点などない完璧超人、学校にはもちろんファンクラブも存在す
る、女子、男子、教師合わせて9割以上が会員というもはや巨大組
織だ。将の父の再婚相手の連れ子で、一週間前くらいから桐ヶ谷家
に住んでいる、しかし婚姻届を出す前日に父が交通事故で死んでし
まい、正確には他人で同棲の形になる。

なぜ同棲の形で居座っているのかはわからないが、今はそんなこ
とを気にせず、自分の家族だと思っている。

「…あと少しでしたのに…」

自分の口に指を添えながら拗ねたように静香は呟いた。将はその
あまりの可愛らしさと艶めかしさに一瞬見とれてしまったが、首
をぶんぶん横に振ると、すぐにベッドから這い出た。

「着替えるから早く出てってくれよ！」

顔が赤くなっているのがわかる。これ以上一緒にいると朝の生理現象が発生してしまう、そう感じた将は、扉を指さしながら出て行くように命じるが、

「お兄様！」

「うわっ！」

話を聞いていないのか、静香は背中に飛びついてきた。

いきなりうしろから抱きつかれ、思わず前に倒れそうになるのを何とか踏み留まるが、そのせいで背中に伝わってくる柔らかな感触をより強く感じてしまい。将の息子が静かに覚醒を始めてしまっていた。

「あ、あぶないだろ！は、はやく出てけよ！」

「ええ〜どうしようかな〜」

悪戯好きな悪魔みたいなことを言いながら、静香は抱きつきながら胸などを手で触ってくる。将は必死に振りほどこうとするが、その華奢な体のどこにそんな力があるのか、びくともしない。

「ああ、お兄様、いい匂いです…」

首の匂いを嗅いでいるのか、静香が肩に顔を乗せてきた、首に静香の吐息が掛かり、思わず背中がゾクリとする。しかも女の子独特のない匂いがし、将の息子は静香に覚醒を完了していた。

「や、やめろ静香」

何かに耐えるように弱弱しく口にすると、静香は将の状態に気づいたのか、にやりと笑いながら触れていた手を少しずつ下へ移動してきた。

「ば、ちよつ、やめろつて！」

「まずい！」

すぐに止めようと静香の腕を掴むが、まるで万力機械のように腕は止まらない。そんな将の焦った様子を楽しみながら、静香はなおも手を進め、そしてついにそこへ手が到達しそうになった瞬間。

「お兄ちゃん、朝だよ〜」

ガチャツという音とともに扉が開かれ、弟の桐ヶ谷 実きりがやみのみが部屋の中へと入ってきた。それと同時に二人とも手を止め、実の方へ視線を向ける。

「なにしてるの？朝ごはんできてるから早く降りてきなさいって母さんが」

「ああわかった、すぐ行くよ」

「うん！」

実は将に頭を撫でて貰うと、上機嫌で部屋から出て行った。

危なかった、もし実が来なかったら…

そう思つとぞつとする、将は実が来てくれたことに心から感謝し、安堵した。そこでようやく静香の腕の拘束がなくなっていることに気づく。

さすがの静香も弟の前では冷静になつたか。

「服は……後でいいか、静香、先降りてるぞ〜」

そう言い残すと、将は一人先に部屋を出て行った。

そんな様子を後ろから見ていた静香はショックを受けていた。なにに対して？ それは、

…なんで？…なんでそんな安心したような顔するの？

そう

…いや…それよりも…

宮代静香は

…あの弟に見せた笑顔…私には見せない笑顔

桐ヶ谷将に

…義弟が…憎い…

ヤンデイタ…

^^ ^^ ^^
^^ ^^ ^^
^^ ^^ ^^

「おはよう千鶴さん」

「あら、おはよう将さん」

リビングに顔を出すと、静香の母、みやしろ ちずる宮代千鶴さんが笑顔で出迎えてくれていた、将は挨拶を済ますと、すでに座っている実の隣の椅子に座る。

「お兄ちゃん今朝はお姉ちゃんと何してたの？」

実の純粋な質問に、一瞬どきつとしてしまう。

「えーと、べ、別になにもしてないぞ」

さすがに本当のことは言えないな。

「ごめんなさいね将さん、いつも静香が迷惑かけて」

適当に話しを流していると、まるで何があったかを悟っているよ
うな言い方をしながら、千鶴さんが牛乳とパンを持ってきてくれた。

「いえ、そんなことないですよ」

本当は結構な迷惑を受けているが、母親の手前、笑顔で返答する。

そう、静香との朝の騒動は、一度二度ではなくほぼ毎日続いていた。朝、学校、夜、どこにいてもとにかくくつついてくる。静香程の美少女に懐かれ、将も最初は浮かれていたが、だんだんとエスカレートしてきており、最近ではなるべくくつつかないようにしていた。

「というか家より学校のほうが大変だよ、主に視線が、

ふう、と小さな溜め息を零しながら、焼き立てのパンに苺ジャムを塗って齧りつく。サクサクの食感に甘い風味が、朝の疲れを癒してくれているのを感じた。

「おはようございます」

少しすると静香もリビングにやってきて、いつものように将の隣に座り、母親からパンと牛乳を受け取る。

「千鶴さん、今日は帰り遅いんですか？」

「そうね、遅くなると思うから夕飯食べててもらえる？」

「わかりました」

千鶴さんのことはよくわかっていないが、どこかの大手会社の社長をしているらしい、本当ならこんな普通の一軒家でなく、もっとでかい家があるのに、なぜかここに住んでいる。将にもその理由はわかっていなかった。

「そろそろ出ないとやばいな、実、先に行きな、静香、悪いけど着替えてくるから先に外に出てくれ」

「うん、わかった」

「わかりました、お兄様」

三人とも自分の食器を片付け、リビングを出た。実は言われた通り一人で「いつてきます」と言って先に行った。

そして将は制服に着替えるために自室に戻ってきたわけだが、

「…で、なんでお前まで俺の部屋に来るんだ？ 静香」

「着替えを手伝おうかと思って」

なぜか静香まで着いてきました。

「いらない」

「ぶ〜」

勝手に部屋までついてきて、不満を言う静香を追い返し、急いで制服に着替え始める。

相変わらず得意ではないネクタイ結びに少し手こずりながらも、なんとか紺の制服を着こなし、鞆を持って部屋を出る。

「おまたせ」

玄関で待っていた静香に軽く謝ると、一緒に家を出る。しかし家を出て数秒、後ろから千鶴さんが追いかけてきた。

「将くん！ 忘れ物！」

「忘れ物？」

そういつて差し出されたものはお弁当、そういえば急いでいたせいですっかり忘れてた。

「千鶴の愛妻弁当」

「おわっ！」

千鶴さんの一言に、受け取りかけていた弁当を一瞬離してしまい、慌てて持ち直す。

そんな将を見て千鶴さんは口を押さえながら笑っていた、からかわれているのがわかっていても顔を赤くなってしまふ。そんな自分を情けないと思う。

「あらあら慌てちゃって、かわいい」

「冗談はよしてくださいよ」千鶴さん

「あら、「めんなさい」

「はあ、もういいです。行こう静香…ってあれ？」

千鶴さんにからかわれ、逃げるように後ろにいるはずの静香に声をかけたつもりだったが、将の後ろに静香の姿はなかった。

「はあはあはあっ」

宮代静香は疲れた体を休ませるために、電信柱に手を付き荒くなつた息を整える。

静香は千鶴さんから弁当を受け取るところをじっと見ていた、すると千鶴さんは将に愛妻弁当と言ってわたし、それを将は赤くなりながら受け取っていた、それを見た途端無意識のうちに、静香は走り出していた。

お母様…本気だ…

静香は確信したのだ。自分の母が本気で兄に好意を抱いていることに、何年も家族をやっているのだ、さっきの母の行動が冗談ではないことがわかる、なぜなら母は冗談などを言う人間ではないと静香は知っているから。

「嫌だ…」

いくらお母様でも、お兄様だけは絶対に渡さない。触れさせたくもない！でもどうやって？

そんなことを考えている静香の前にアリが二匹、虫の死骸を取り合っていた。そんな光景を静香じっと見ていた。周りから他の生徒が静香を見ているが、静香はアリのをじっと見続ける。

すると片方のアリがもう片方のアリをかみ殺し、死骸を運んでいく。これが自然の摂理

弱肉強食。

「これだ…」

静香はそう小さく呟くと、不気味な笑みを浮かべながら、学校への道を歩み始めた。

いつの間にかいなくなっていた静香を追うように、少し急いで通学路を進むが、静香の姿は一向に見えてこない。

「どうしたんだろ、静香の奴、先に行くなんて珍しいな…まさか待ち伏せなんてないよな？」

「冗談で口にしてみたが、後から気づいた。

ありえる。」

そうだ、相手はあの静香だ、公衆の面前で突然抱きついて来てもおかしくない。将は常に周りを気にしながら学校へと向かった。

「すみません」

「で、遅れた理由は？」

今現在、将は担任の教師、平沢先生にしかられている。まあ結論を言うと将は遅刻したのだ、あまりに周りに気をつけすぎたせいで、門を通ったあとにチャイムが鳴り、おくれてしまったのだ。しかも教室に入った瞬間に静香に抱きつかれ、結局警戒した意味はなかつ

た。

とりあえず抱きついてきた静香をかわし、男子からの殺気に耐え、今は遅れた理由を問われていた。

「ゆっくり歩いてたら遅れました。」

「そうか、じゃあ廊下に立ってる。」

遅れただけで？ そう思った将は反論しようとしたが、先生も静香のファンだったことを思い出し、あきらめて廊下に立っていることにした、教室を出るとき、静香が教師をにらみながら鉛筆を折っていたのは将の見間違いではないだろう。

ホームルームが終わり先生が教室から出ていき、将は自分の教室に入った。

自分の席に座ると、右の席に座っている静香からさっそく声をかけられた。

「お兄様！大丈夫ですか？」

「大丈夫って、ただ立ってただけだよ」

俺どんだけひ弱だよ。

「そうですけど」

静香は将に関してだけはすごい心配性だ、こないだは転んだだけで救急車を呼ばれそうになり、大惨事となったこともある。なんだ

が情けなくなってくる。

「はっはっは！さすがだなく将」

「突然なんだよ、明」

今度は左の席から声をかけられた、親友の古河^{こが} 明^{あきひ}だ。スポーツは何でもでき、勉強もそこそこできる。しかもイケメンで明るいということで、当然女子からはもてもてだ。

「いや〜朝から笑わせてもらったよ。まさかおくれた理由がゆっくりきただなんて、くっくっ、馬鹿にしてるとしか思えない理由じゃねえか」

「本当のことなんだからしかたないだろ」

まさか静香を警戒してきたなんて言えないしな

「ふうんまあいいや、それより将、お前放課後暇か？」

「ああ、ひ」暇じゃありません」「

暇だと言おうとしたら、なぜか話しを聞いていた静香に返答されてしまった。将が何か言おうとすると、それを遮るよつに明が口を出した。

「久々にゲーセン行こうと思ったんだけど、もちろん宮代さんも一緒に」

「行きません、あんなタバコ臭いところ」

基本的に静香はタバコが嫌いらしく、あまりゲーセンには行きたくない。これはおとなしく帰るかな。

そこで終わりかとおもわれたが、明が邪悪な笑みを浮かべながら告げた。

「カップルで撮る、プリクラもあるんだけど」

「行きます！ ちょうど今日暇だったんです！」

「即答!?!」

さつきは暇じゃないとかいってたのに何いってんだ？ 将は横目で静香を睨むが、静香は気づいていないのいるのか、明と話を続けている。

「じゃあ放課後」

「はい」

結局最後まで何も言えないまま終わってしまった…しかも勝手にゲーセンに行く約束までされてしまっている。

ま、最近行ってなかったしいいけどね。

この時は思いもしなかった…まさかあんなことになるなんて…

ヤンでれ・・・中

今は午前授業最後の体育、男子はサッカーで女子はテニスだ。今は教師の先生が説明をしているため、体育座りで座っている、正直男子は皆女子のテニス姿に夢中だ、そんな中先生の話を一人まじめに聞いていると、隣に座っている明が袖をつんつん引っ張ってきた。

「ほえ〜やっぱスタイルいいんだな〜静香さん」

「そうか？」

「はあ？なにいつてんだお前？見てみるよ」

そう言われて無理やり顔を掴まれ、テニスコートの方を向かされる。テニスコートではすでに試合が行われており、静香がストレートで勝っていた。

「どうだ？」

「どうだって…まあ認めるけどさ」

将が静香のスタイルがいいのは百も承知、なにしろ一緒に住んでる上に誘惑してくるのだから、気づかないはずがない。

しかし全てを認めるわけにはいかなかった、もし認めてしまったらすぐにでも静香を好きになってしまう。兄妹でなくとも、家族だと思っている将は静香を好きになるわけにはいかなかった。

「スタイルや顔が良くても性格がな…」

「いやいや、性格だつていいじゃねえか」

「ぐっ、とにかく!」

「そこ!うるさいぞ!」

ついカツとなつて反論しようとしたところ先生に怒られてしまった。将はしぶしぶ謝ると、明を横目で睨み付けた、明も悪いと思つているのか、こちらを見て手を合わせていた。

そして自分達がうるさくしている間にチーム分けが終わつてしまつたらしい。将はAチームで明Bチームに振り分けられた。

「えーと」

今まさに試合の真つ最中、チームの力も互角なのだが…

「食らえや!」

「死ね!桐ヶ谷」

とりあえず一言

「サッカーじゃねえよ! なんで俺キーパー!? というかなんで味方までシュートしてんだよ!」

「それは当然お前が憎いからにきまつてんだろおお!」

確かに、もし自分が彼らの立場だつたらそうしたかもしれない。

だがそれは彼らの立場だったらの話だ。

「だからって、おわっ！」

説得を試みるが、頭に血が上っているためか、誰も話を聞いてくれない。

そんなとき事件は起きた。

サッカー部エースの嫉妬によって最速のボールが将に向かって打ち出されたのだ。

ヒュッ

それでもなんとかしゃがんでボールを交わした。

「あぶねえ！将」

ガッ！

明の声が聞こえた瞬間、頭に強い衝撃を受け、脳が揺れるの感じ、体が後ろに倒れていくのを感じながら、将の目に当たったものが写った。

ああ、スパイクか、どおりで硬いと思った。さっきのボールの方がマシだったのか？

それを最後に将の意識は闇へと落ちた。

「お兄様!!」

静香はすぐに将のところへ駆け寄った、将にスパイクが飛んでいくのを見た瞬間にテニスコートから飛び出していた。

「しっかりしてください!お兄様!」

倒れている頭を持ち上げて、仰向けにさせる。

その時手に何かが触れた。

「え…?」

…血?

…血、血、血

……お兄様の…血…

「いやああ!! お兄様が死んじゃう! は、早く病院に!!」

頭が少し切れて出ただけで、本当に少量だったが、静香の気を動転させるのには十分量だった。

周りの生徒達は、静香の登場に完全に固まってしまっていた。

「保健室!」

そう思った瞬間、持ち上げるために足と首に手をかける。

「大丈夫ですか？ 僕が運びましょう」

そう言いながら手を出してくる男がいた。

こいつ、さっきお兄様にスパイクを当てた奴

「あ、ずりい！ 俺も運びますよ！」

そういつと多くの生徒が我先にと立候補してきた。そしてスパイクを当てた男の手が将の体に触れる瞬間。

「触れるな！！！！」

「がっ！！」

静香が顔面に蹴りを当て、ふっ飛ばしていた。

「それ以上近づいたら……みんな殺します……」

吹っ飛ばされた男は歯が抜け、白目をむいて気絶している。

本当なら今すぐ全員殺したいところだけど、今はお兄様を保健室に連れて行かなければ

そして将を抱きかかえると、男子を睨みつけ、信じられない速度で保健室に走っていった。

男子は走り去る静香の姿をただ見ていることしかできなかった。

「ん……」

将はゆっくりと目を覚ました。

するとそこには白い天井が広がっており、薬独自の匂いが鼻をつんと刺激してきた。

そこが保健室だと気づくのに10秒も掛からなかった。

「保健室……っ」

上半身を起き上がらせると、頭に痛みが走った。

「そうか、俺は確かスパイクが頭に」

なにが起きたのかを思い出し、傷が付いている頭に手を触れると、誰かに治療されたのか、頭に包帯が巻いてあった。

「包帯が必要なほど傷が深かったのか？」

ガシャンッ！

何かを落とした音にびくつと反応し、扉の方に顔を向ける。

するとそこには静香が立っており、手に持っていた大量の薬品を地面に落として固まっていた。

「静香？」

名前を呼んだ瞬間、静かは目にも止まらぬ速さ泣きついてきた。

「お兄様~~~~!!」

「ぐはっ!」

「心配しました~~~~! 死んじゃうかと思いました~~~~」

腹への一撃に、一言文句を言ってやろう思ったが、本気で心配してくれていることに気づくと、静香の頭に手を置いて微笑む。

「馬鹿だな〜こんなことくらいで死ぬわけないだろ、まあでも、ありがとな、静香」

「お兄様……」

頭を撫でてやると、静香は安心したように目を細めた。

「っていつか、もう放課後なのか、そろそろ帰らないとな」

頭を撫でながら時計に目を向けると、時間は既に5時を回ったところだった。しかし静香の方を見ると、小さな寝息が聞こえてきた。

「まったく仕方ないな……」

しばらく寝かしておくか、と思ったが、そこで重要なことに気づいた。

「う、動かねえ」

静香に抱きつく形で寝られているため、動きが取れない、仕方な

く無理矢理抜け出そうと身体を……

「動かない……」

動かせなかった。この華奢な身体の何処にそんな力があるのかま
ったく想像できなかった。

「頼む静香！ おきてくれえ〜」

結局抜け出せたのは2時間後の7時だった。

学校の見回りに来た用務員に怒鳴られて静香は起きた。

家に帰るときには静香にお姫さま抱っこをされるといって羞恥プレ
イを味わうこととなった。

「今日は疲れた〜」

帰ってきてすぐに飯を食べ、高速で風呂に入り、現在は自分のベ
ッドでうつぶせになっていた。

「ふあ〜、っと、そういうえは今日明とゲーセンいく約束してたんだ
っけ、悪いことしたな」

携帯を取り出し、謝罪メールを送ると、そのまま充電器に携帯を
差す。

「そっだ、今のうちにやっておくか」

ベッドから飛び起きると机の一番上の引き出しを開けた。

中から取り出したのはU字型の錠前だ。いつも朝静香が侵入してくるため、前に買ったのだ。

壁と扉に穴をあけ、輪が付いた金属の板を取り付ける。あとは南京錠で輪同士を通してロック。

「これでOKか」

開かないことを確認すると、そのまま将はベッドに入り、安心して眠りへとついた……

ヤンでれ・・・下

現在夜中の0時、みんなが寝静まった今、静香は一人、将の部屋に訪れていた。

ガッ！

「？」

しかし、扉を開けようとすると、何かに引っかかる音が聞こえ、開かない。

鍵？でもお兄様の部屋鍵はついてないはず、用心棒。

再度あまり音をたてないよう、数回扉を開けようと試みる。

この金属がぶつかるような音は、錠前ね、この手の扉に仕掛けられるのは南京錠くらいかしら…まあなんにしてもそれなら話は早いわ。

静香は扉を片手で開けようとし、止まったところで少しずつ力を加えていく。

ギツギギツツ…ガッ

外れた。正確に言うと、南京錠に繋がっていた板が、ネジごと抜けたのだった。しかしネジが潰れかかっているのを見ると、相当の力がかかったのは一目瞭然だった。

「やてと…」

部屋に侵入し、静香にとっての日課を開始する。

その一、お兄様のメールチェック。

静香は毎日一度、兄のメールを確認している。理由はもちろん兄の異性の把握、友好関係である。

「今日もあいつ以外の人とメールはしていないようですね」

このときのあいつとは明のことである。兄のメールチェックを終えると、次のステップへ移る。

その二、お兄様の追加品のチェック。

この追加品とは、将が新たに買ったものならすべてが含まれる。

「今日はないですね」

1時間かけて部屋を物色したが、なにもあたらしいものは出てこなかった。

静香はノートとペンを取り出すと、今日の日にちに×印をつける。

このノートは秘密の将ノートである。将の部屋にあるもの、癖、仕草、好きなもの、嫌いなもの、etcと、将に関する情報が細かくしるされているヤンノートである。

その三、異性の好みチェック。

まあ簡単に言うと、将のもっている18禁雑誌をチェックして、どんな子が好きなのかをチェックするのである。

「ふむ、何も変わってないわね……」

将の本棚の一番下、漫画の奥に隠してある雑誌を読みながら頷く。

その四、お兄様の服を一枚回収して撤収。

こうして静香の日課が終了する。回収した服は使ったあとに洗って返しています。

ちなみにこれだけのことをしながら一緒に寝ようとしなのには理由がある。理由は簡単、襲うより襲ってほしいからである。

無理矢理襲ったのでは本当の愛はないと考えている静香は、なるべく自分からは襲わないようにと決めている。

こうして静香の長い一日は幕をおろす。

……

………心配……！

「はっ」

「きゃう」

目覚めとともに邪悪の気を感じ、枕を前に出すと、迫っていた静香の顔に直撃した。

その隙を逃さずにはやく布団から脱出する。

「むくく、最近どんどん反応良くなってきます……」

さりげなく枕の匂いをかいで、恨めしそうな目でこちらをみてる。

「ふ、いつまでも弱いままの俺だと……ってお前どうやって入ってきたんだよ！」

そこで昨日鍵をつけたのを思い出して問うと、平然と、

「普通にドアからです」

言われて扉を見ると、鍵の板が宙にぶら下りながら扉についていた。

「……お前、もしかして人間じゃないとか？」

「愛の力と行ってください、お兄様」

愛の力でこんなことができれば世界は犯罪まみれになってしまうだろう。

そんなことを思いながら、部屋から静香を追い出し、制服に着替えるのであった。

「おはよう〜」

「おはよう」

「おはよう、お兄ちゃん」

リビングに下りると、千鶴さんと実は返事をしてきてくれた。

食べていたパンを啜えながら、近づいてきた弟の頭を撫でようと手を――

「おはようございます！ お兄様！〜」

「ぐはっ！〜」

とした所に静香が体当たりをしつつ後ろから抱きついてきた。

「お、おはよう静香、だから離れてくれ」

「や」

それだけいっと抱きつく力があがり、背中であぐさししてくる静香。

「やめなさい静香、将さんが困ってるでしょ」

千鶴さんが将の分のパンを机に置きながら、静香を注意する。

「困ってなんかいないわ、むしろお兄様は喜んでいるもの」

「ええ!？」

将自身が一番驚いていると、静香は潤んだ瞳をし、上目遣いで「ちらを見上げた。」

「嬉しくないの…?」

「いや、まあ、うれしい、かな」

「お兄様大好き!!」

そんな静香を苦笑いで頭を撫でていると、千鶴さんが、少し不満そうな表情をした。

「そういえば将さん、お弁当箱知りませんか？ 将さんのだけ見当たらず」

「弁当箱？ おかしいな、昨日出したはずですけど」

二人で弁当箱の行方を考えていると、静香が机の上に、将の弁当箱を置いた。

「今日は私がお兄様のお弁当作りました」

「ちょっと静香、勝手なことはしないで頂戴、私が将くんのお弁当を作っているのよ?」

自分の役目を勝手に取られたことがカンに触ったのか、少し怒り
気味で静香に言った。

「それも今日までで結構ですお母様、今日から私がお兄様の愛妻弁
当を作ります」

「それは許せないわね」

「なにがですか？」

「うおーっとなぜだかわからないが、目の前で未だかつてない親子
喧嘩が始まるうとしてしている。」

「…ここは将くん決めてもらいましょう」

「…そうですね」

「え？ 俺？」

二人の喧嘩を見届けようと思っていた将は、突然自分に矛先が向
いて焦る。

「では」

「どちらのお弁当がいいですか？ お兄様」

詰め寄ってくる二人をみて、どう答えたらいいのかを探し出す。

「どっちも美味しいから交代で作って、ってというのは…」

二人はしばらく考えたあと

「将くんがそういうなら……」

「わかりました……」

そういうことで将のお弁当は毎日交代して作る事に決定した。そのとき弟の実に服をくいつと引つ張られた。

「どうした実？」

「遅刻しちゃっよ？」

「うえ？」

言われて時計を見る。学校のチャイムまであと十分。

「やべえ！　いくぞ静香！」

「はい！　お兄様！」

騒がしい朝の所為で飯も食えず、将と静香は家を出て行った。

家を出てから5分、現在将たちは学校に向かって必死に走り続けている。

「はあはあはあ」

「うわぁ、走ってるお兄様も素敵です……」

そっついながら静香がにやける。

訂正、必死に走っているのは将だけで、静香はバック走行で将の少し前を走りながら、将の顔を眺めていた。

「お前、やっぱ、バケモンだろ、はぁ」

「失礼ですお兄様、愛の力と行ってください」

「くっそー！ー！」

愛の力ってなんだよ！ と思いながら将は走り続けた。

キーンコーンカーンコーン

「昼休みですよ！ お兄様！」

「わかってるよ……」

今は昼休み、結果的にいうと将達はなんとか間に合った。しかしそのかわり、将は昼休みまで爆睡していたのだった。

「さぁ！ 早くお弁当食べてください！！」

「わかったわかったよ」

しつこい静香にせかされながら、渡された弁当の蓋をあけー閉めた

「たまには屋上で食べるか、静香」

「え？ はいお兄様がお望みなら」

「行こう」

そして場所を移して屋上、今日は暑さのためか、誰も屋上には人がいなかった。

「おい静香」

「なんですかお兄様？」

「これはどういふことだ？」

そういつて弁当の蓋を開けると、ご飯に大きなハートマークが書かれていた。

「愛妻弁当です」

「恥ずかしいからどういふのはやめろ！」

「え〜」

うな垂れる静香を見て、ため息をつく。

「今日はもういいけどよ、ってあれ、お茶忘れてきちまった」

「あ、じゃあ私取って来ますので食べてください!」

「いいのか?」

「はい!」

そういつてすぐに静香は屋上から出て行った。

行ったのを確認してから弁当を開ける。

「まったく、よくこんな恥ずかしい弁当作れたな」

あらためて弁当の中身を見て、苦笑しながら一口食べる。

「でもやつぱづめえや……」

「そうかよ」

ガンツ!

知らない男の声がした瞬間に何かで頭をなぐられ、将の意識は一瞬で闇へと落ちた。

静香は現在将のお茶を教室から回収し、屋上への階段を登っていた。

「たべてくれてるかな？」

将の食べている姿を想像しながら屋上の扉をあける。

「お兄様！ 食べて…」

そこで静香の言葉は切れた。そこには将の姿がなかったからだ、あったのは、ぐしゃぐしゃになった弁当箱と、一枚の紙。

“市外の廃棄工場跡地で待つ”

そこで静香の考えたことは大好きな将の安否よりも先に違うことを考えていた。

ああ…この人を殺さないと…

「つつ！」

将は見慣れない工場の中で目を覚ました。身体を動かそうとしたが、縄で縛られていた。しかも後頭部が痛い。

そこで自分が連れ去られたのを思い出した。

「よお、目え覚めたか？」

「お前は、サッカー部の…」

「そ、安部武光あべ たけみつだよ、お前にスパイク当てた」

将の目の前に現れたのは20人ほどの見た目暴力団と、サッカー部のエースの安部だった。

「なんでこんなことを」

「ああ？ 何言ってるんだ今更、わかってんだろ、お前を使って宮代静香をおびき出すんだよ」

「どうして？ がっ！」

そこで頭を蹴られた、後頭部にも響いて痛みが半端ない。

「どうしてもくそもあるか！ あの女、おれが何回もアタックしてやっても全部シカトしやがって、しかも顔まで蹴られちゃ黙ってられるか…少し可愛がってやる」

「そんなこと…すぐにバラして…」

痛みで気絶しそうなのを絶えていると、安部が高らかに笑った。

「心配後無用、ばねえよ！ 全員でやってるところを写メで取っておけばなあ」

「下衆が…」

「へ、いつてる、お前にはちゃんと見学させてやるから安心しな、そうだな、お願いしたら一回やらしてやっても…がっ！」

全て言い終える前に頭で顔面に頭突きを決めてやった。頭が痛い
が関係ない

「それ以上喋るな!!！」

「ぐっ、てめえ！ おい、こいつやっちまえ！」

「がっ、ぐふっ!!！」

周りにいた暴力団5人に殴られ、蹴られる。

「ったく、おい、気絶させない程度にしとけよ」

あらかた殴られると、もはや痛みをあまり感じなくなっていた、
感じるのは口の中に広がる鉄の味。

「ちなみに助かるなんて思わないほうがいいぜ、ここは暴力団コン
ドルの本拠地だからな、ちなみに外にはまだ30人程仲間が見張
って…」

ドガアアアン！！！！

そのとき工場の巨大な鉄の扉が吹き飛んだ。

そのあまりの衝撃にあたり一帯が砂埃で見得なくなる。

「ごほつ！　なんだ！　どうした！」

そして砂埃がやむと、そこに立っていたのは、返り血を大量に浴びた、静香の姿だった。

「宮代静香？　外の奴らはどうした！」

「み、みんな血だらけで倒れてます！」

「な、なんだと！？」

部下の報告を受け驚いている阿部に静香が頬についた血を拭いながら告げる。

「大丈夫、みんな死んでない、ただ通してくれないから痛い目に合わせただけ」

そのまったく表情の読み取れない静香に恐怖した安部は、焦ったように部下に命令をだす。

「ぜ、全員で掛かれえ！」

鉄パイプや、バットをもった男が20人で静香を取りかこんだ。

「やっちまえ！」

「うおらあ！」

3人ほどが静香に殴りかかったが、それを指で受け止めると、二人を蹴り飛ばし、一人をバットごと壁に叩き付けた。

「大丈夫、あなたたちは殺さない」

そっいいながら一人、また一人次々と殴り倒していき、ついに最後の一人が血を吐いてふっとんだ。

「やっと、あなたの番」

そっいいながら無表情だが、確かに怒りの籠もった目で阿部を見据える。すると安部は倒れていた将の首を持ち上げた。

「あぐっ！」

「つつ！ まて宮代！ こっちには人質がいる！ おとなしくしろ！ さもな……」

ドスツ！

言い終える前に、静香が投げた包丁が安部の腕に突き刺さっていた。

「うでがああああ……！」

「五月蠅い……」

ドンッ！

続いていつの間にか近づいていた静香が、安部の腹を蹴り飛ばしていた。十メートル近く飛んだのち、瓦礫の中に突っ込んでいった。

そして倒れ掛かっていた将を抱きとめ縄を切ると、静香は近くに落ちていた鉄パイプを足で拾いあげると、安部の前に立った。

すでに気絶している阿部は、ただ倒れているだけ。そんな安部に向かつて静香は鉄パイプを思いつき振り上げ告げる。

「死ね」

「まて、静香」

下ろすところで、静香の前に立ちふさがった。

「待たない、殺す」

「もういいんだよ」

「良くない！」

そこで静香が声を荒げた。

「そいつはお兄様にこんなひどいことをした。たとえお兄様が許しても私が許さない！！」

「確かに俺もこいつは許せない」

「だったら！」

どうして!?! という前に静香の肩に手を置く。

「でも…俺は家族が…大切な静香が人殺しになる方が、もっと辛いし。嫌だ」

「でも…でもお」

静香は鉄パイプを振り上げま、涙を流していた。そんな静香が愛おしくて、無意識に抱きついた。

「ありがとな、静香。こんなに思われて、俺は世界一幸せな兄貴だ」

そう言った瞬間、静香は鉄パイプを離し、緊張の糸が解けたように将の胸の中で泣き続けた。

その後、警察と救急車を呼び、将達は別の病院へ行った。将は頭の傷がひどいため一週間の入院を言い渡され、現在も医療中だ。

「お兄様〜愛してます〜」

「わ、こらやめろ静香！」

あの事件以来ますます静香のスキンシップは激しくなっていました。しかし、やはり誰かが傍にいるのは安心する。

「将くん、お見舞いに来たわよ〜」

「きたよ〜」

そういつてお菓子を持って病室に入ってくる千鶴さんと実。

そして将の隣に座ると、千鶴さんはお菓子を口に運んできた。

「はい、清人さんあ〜ん」

「え〜と」

「がう〜！」

反応に困っていると、抱きついていた静香が千鶴さんのお菓子に食いついた。

「なにするの静香〜！」

「ふん〜！」

そしていつものように二人の喧嘩が始まる。

「はあ」

「お兄ちゃんお兄ちゃん」

そんな二人を見てみると、実がお菓子をつ持って近づいてきた。

「あ〜ん」

「あ〜ん」

「美味しい？」

「おお、旨いぞ」

弟の差し出されたお菓子を食べ、頭をなでると、うれしそうに笑う。それに気づいた二人が怒鳴り声をあげる。

「「あーーーーずるい！」「」

(やっぱり、実に見せるあの笑顔…ズルイ)

そんなことを思っている静香など知らない将は、これからもずっとこんな日が続くことを節に願っていた。

震・ヤンでれ…出会い…

「やっと帰ってきた…」

そう言いながら大きなボストンバッグを持った女の子が、電車から見える街を眺めていた。

「待っててね…将君…」

将said e

「い、行ってきます…」

「行ってきます」

あの事件から一週間、病院から退院した将は、いつもどおりの生活へと戻っていた。

そう、いつもどおりの生活に…

「なあ静香…あの朝のあの起こし方はなんとかしてくれないか？」

いつもどおりということは、毎朝の女難も変わらないわけで…つまり現在も将は、静香の朝の起こし方に大きな不満があるというわけだ。

というか朝から縄をもってベッドの隣に立たれていたら、誰だっ

てそうなるだろう。

そして現在登校時間を利用して静香にそのあたりの件を説得して
いたわけだが、なんだか静香の先ほどから様子がおかしい。いやい
つもおかしいんだけどさ。

「って聞いているのか静香？ さっきからやたら周りを気にしてるみ
たいけど」

「……」

さっきからしきりに周りを警戒している義理の妹を見ながら、将
も気になって辺りを見渡すが、特に変わった様子は見当たらない。

「なあ、どうしたんだ？ いつも以上に頭の調子悪いのか？」

しかし静香は将の言葉に反応せず、今だゴミ箱や電柱などをやた
ら気にしている。

……やっぱり頭の中でも壊れたのだろうか？

そんな失礼なことを考えながら、将は静香の肩を叩く。

「おい、大丈夫か？」

と声をかけた瞬間、

「！そこ！！」

静香は振り返りながら将の後ろのゴミ捨て場に向かって包丁を投

げつけた。

「……っておい！ 突然何してんだよ！ ってか何でそんなもん持ち歩いてるの!?!」

突然のことに心臓をバクバクさせながら静香の両肩を掴み怒鳴りかかるが、当の本人は包丁を投げた所を見て呟く。

「逃げたか…」

お前はどこの暗殺者だ…

「誰かいたのか？」

将が後ろを振り向き、包丁の突っ込んでいったところをみると、ゴミ袋の間から、ごそごそとネコが飛び出してきた。

「なんだよ、猫じゃないか」

「お兄様、落ち着いて聞いてください」

「まったく」、と続けようしたら、静香に両手で顔を両手で掴まれ、ゴキツという嫌な音をたてながら、無理矢理顔を正面を向かせられた。

「まずはお前が落ち着け、首にヒビが入っちゃう」

「じゃないよ取れちゃうよ僕の頭。」

将は掴んでいた静香の手を払い、首を優しく揉み揉みとほぐす。

「んで、なんだって？」

真剣な表情でこちらを見つめる静香の表情に、周りの空気がちりちりと圧迫されてような感覚が辺りを包みこむ。

そして静香はゆっくりと告げた。

「お兄様は狙われています」

…

…

…

「は？」

「狙われています」

さりげなく聞き返してみたが、同じ口調で返されてしまった。

「ええと、一応聞くけど…誰に？ あ、もしかして親衛隊の奴らか？」

その可能性が一番高いだろう、またこないだみたいな奴が現れるかもしれない。

こりゃあこれからは、俺ももう少し気をしっかり引き締め

「お兄様を狙う雌のゴキブリの匂いが…」

「てーって、あれもう一度いいか？ 静香？」

「だから、お兄様を狙う、黒いテカテカですよ」

ちゃんと聞いててくださいよ、みたいな感じで怒られてしまった。

あゝ、そうかゝ、ゴキブリかゝ……

「はあ」

聞いた俺が馬鹿だった……

とりあえず小さな溜め息を一つ零し、静香を置いて学校へ早歩きを始めた。

「待つてくださいお兄様！ 本当なんです！ 昨日の午後七時十三分八秒、お兄様がお風呂で髪を洗っているときにこの市に入って……」

だからお前はどこの暗殺s y

「ってちよつとまで！ その時間云々の前になぜ俺の髪を洗っている時間がわかる……！」

しかも秒単位だと！？

「そんな当たり前のことはどうでもいいんです……！」

「どうでもよくないよ……？ ちょっとまで……！」

「プライバシーは大切だよ！」

結局その後も口論しながら二人は学校へと向かったのだった。

「おい、朝から大丈夫か？」

将の数少ない友人である明が、心配して声をかけてきてくれた。

「ああ」

「そういえば静香さんは？」

「ん」

将は身体を机にのせ、顔を伏せたまま指だけ扉を指す。

明は指のさした方向を目で追っていくと、妙な光景を目にした。

「…なにやってんだ？ あれ」

あれ、というのは、扉の死角から入ってくる生徒を一人一人確認している静香のことで間違いないだろう。

「なんか知らないけど見張りらしい」

「なんの？」

「ゴキブリの」

「はあ？」

答えを聞いた明が分けがわからないという顔をしている。当たり前だ、実際将にも静香が何を言ってるのかまったく理解していないのだから。

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなったため、ドアの死角に隠れていた静香が将の隣の席へと戻ってきた。

しかしまだ諦めていないのか、その表情は未だ険しくドアを見つめている。

「んで？ ゴキブリはいたか？」

「いえ、けどもうそこまで来てます……」

まだ言うかコイツ、と考えたところで、ガララッつとドアが開かれ、誰かが入って来る。

まさか……本当に！？

「席についてるか？」

入って来たのは独身男教師武山三十二歳だった。

…武山ゴキブリ？

「…来ます」

「へ？」

そんな馬鹿なことを考えていると、静香が小さくつぶやいていた。その目には殺気に近い熱が籠っている。

「え、今日はめっさ可愛い、というかみんなが知ってる有名人が転校してきたぞ〜！」

いつもテンションの低い武山が、珍しくテンションが高い上、かなりの美少女という言葉に、クラスの男子全員が騒ぎ出した。将以外は

「では、入ってください」

なぜ丁寧語

ガラッ

教師の声と共に再びドアが開かれ 静香が飛び出した。

ヒュッ

転校生の足が片方ドアの敷居を跨いだ瞬間、静香はその人物に向かってとび蹴りをかました。

この衝撃的光景に将の思考は一瞬止まったが、静香の身体能力は暴力団を壊滅させるものだと思いつくと、すぐに血の気が引いた。

「お、おい！ 静香！！ 何やって！！」

「ちっ！！」

しかしそこで更に信じられない光景が目に入った。

あの静香が弾き飛ばされた。転校生はドアの向こう側にいるためどうやったかはわからないが、静香を教卓の方に吹っ飛ばしたのは見てわかった。

静香は舌打ちしながらも回転しながら教卓の横に着地し、置いてあった新品のチョークを6本、信じられない速度でドアの向こうに投げつけ、動きを止めた。

「突然ご挨拶ですね」

ドアの向こうから転校生の声と共に、砕かれたチョークが投げ捨てられる。

「…あなたは排除しなければなりません」

「あら、なんでですか？」

「決まってる、あなたはお兄様に害を与えるゴキブリ、うるちよろする前に潰す」

クラスメイト達はこの意味不明の状態を黙って見ていた。教師の武内は、教室の端っこでブルブル震えている、とても頼りにならない

ゴキブリって転校生のことだったのかよ

「そうですか、ですがちょうどよかったです」

そこまで言うのと転校生がついに教室に入ってきた。

「ちょうど私も、将君に憑いた寄生虫を取り除かなきゃいけないから」

そう言いながら入って来た美少女は、将の幼馴染である、新崎凜であった。

震・ヤンでれ…無理…

「初めまして、新崎 凜です」

そう言いながら凜は礼儀正しく頭を下げた。まるでさっきの出来事が嘘かのような見事な立ち振る舞いだ。

「え、ではとりあえず、質問がある奴は手をあげる」

「はい」

少し凜から距離をとりながら教師が言った瞬間、男子達が一斉に手をあげた。

「では荒井」

「はい！ なんでアイドルやめたんですか？」

気づいていなかったが、凜は「TENSHEI」という大人気アイドルだったらしい。なぜか昨日やめてしまったらしく、会社も困っているという。

そりゃあ困るわな。

「将くんは寄生虫が付いたからです」

寄生虫とはおそらくというかほぼ確定的に静香のことだろう、さっきそう言ってたし。

「い、一応聞きますが、その、好きな人は…」

「いませんよ」

その一言にクラス全員が沈黙した。

そして次の瞬間にわっと男子達が騒ぎ出した。

「そのかわり、愛してる人はいます…」

男子達が倒れた……

「どうせ、ゴキブリでしょ……」

となりから静香の恐ろしい一言が聞こえた、明らかに不機嫌な顔をしていらっしやる。

「寄生虫はだまっててください」

どうやら聞こえていたようだ。なんとという地獄耳。

睨み合つふたりの間に、すさまじい殺気が激突しているのが、目にうつりそうなほどよくわかる。

「じゃ、じゃあ質問はこれくらいにして…新崎の席は…」

「先生」

先生の声を遮って凜が発言する。

「私、将君の隣が良いです」

しかしすでに将の隣には、静香が座っており、一番後ろの席なため、となりは静香の席しかない。

「しかし、そこにはすでに宮代が…」

「関係ありません」

そう言って静香と凜が黙って先生を威嚇しはじめた。

「先生、そんな奴の言うこと聞く必要ありません、廊下にも座らせとけばいいんですよ」

と静香から威嚇。

かわいそうに、これはどちらを選んでも死しか訪れないな。

将は心の中で合掌しながら、怯える先生を見守った。

「え、え」と

先生が出席簿を何度もみながら二人の顔を見ていた。

そしてふいに将と目が合う。

すると奴の目がきらり、と光った気がした。

とてつもなく嫌な予感がする。

「よし！ じゃあ将に決めてもらおう」

やっぱり責任転化しやがったあの野郎！ しかもどや顔で！

そして二人の視線が今度はこちらを向く、視線だけで死にたい気分になってくる。

「先生」

「…なんだ？」

「机…もって来て良いですか？」

「…許可」

結局もう一つ席をもってきて隣に座らせることで納得してもらった。

そして現在はホームルームが終わり、転校生の席に人が群がっているところだ。

「すげー人気だな、凜の奴」

「そうですね…」

明らかに嫌そうな顔をしながら集団を見据える静香。

「もう少し仲良くできないのか？」

「仲良く…ですか。すみません、いくらお兄様の頼みでもそれはちよつと…」

「そんなに嫌いなのか？」

「嫌いというか…お兄様に手を出さなければいいのですが…その…なんていうんでしょう、本能がこ…う…ポキッと」

「ポキッてなに!？」

そういいながらジェスチャーで何かを折る動作を繰り返す静香。

あらためて義妹の危険度を知った瞬間であつた…

そして放課後、なんだかんだいって今日は凜の取り巻きが常にいたおかげで、今朝のようなバトルは起こらずにすんだ。

「帰りましょう、お兄様」

凜が自分の鞆を両手持ちながら立ち上がった。

「そつだな」

今日は色々と疲れたから早く寝たい…

「将君」

「ん？」

そこで騒ぎの元凶である凜が、取り巻きをどかして出てきた。

「私も一緒に帰っていい？」

「ああ、「だめに決まってるでしょ…」「」

全て言い終わる前に割り込まれてしまった。犯人はもちろん静香だ。

「寄生虫に聞いてないわ」

「なんですって？」

ああ、二人の間に再び嵐が吹き荒れようとしている。

「はあ、二人とも、喧嘩すんなら席はなれてもらっぞ」

「でも…」

「ですが…」

それでも納得いかない顔で、睨みあっている

「はあ、じゃあ一人で…」

「私たち仲良しになった」

「はい」

帰る、といおうとしたところで二人が肩を組み始めた。

すんごい嫌そうな顔してんな……まあ喧嘩するよかマシだな。

そんなこんなで、結局三人で帰ることになった。

わけなんだけど……

「くつつくな」

「嫌」

「やです」

昇降口を出たところから、二人が両腕に引っ付いて来て離れてくれない。

そしてあつまる視線、嫉妬、殺気。

「生きた心地がしねえ……」

「排除しますか？ お兄様」

またまたジェスチャーで何かを折るような動作を繰り返す静香をみて、将は溜め息をつく。

「やめてくれ…」

帰り道、こんな調子で商店街を歩いていたら、

「よう兄ちゃん、可愛い子二人も連れてなにやってんだ？」

見るからにやばそうなヤンキー二人に絡まれてしまった。なんていうか、漫画にでるモブキャラっぽい。

「おお、可愛い！ どうだ譲ちゃん、こんな男ほつといて俺らと遊ぼうぜ」

一応男はだし、ここは俺が止めに入っておくか。

仕方ないと思いつつ、静香たちを後ろに隠すようにして、二人の前に立ちふさがる。

「お前ら、その辺で“バキッ”っ痛」

「男は黙ってな」

そういつて片方の不良に殴り倒されてしまった。

口の中が切れたのか、血の味が口に広がっていく。最悪だ。

そんな将を見ながら大笑いする二人組の声が響き渡る。

「だっせ〜!」

ガッ!

「へっ?」

なんとかうつすらと目をあけると、そこには間抜けな声を出した二人の顔を鷲づかみにした静香達が…

ガンツ!!

「ギヤア!!」

物凄い勢いで地面に叩きつけていた。

叩きつけた後頭部をもう一度持ち上げると、地面と頭の間血の糸ができる。

「「死ね」

「やめろ!」

もう一度叩きつけようとした二人を両脇に抱えながらその場から逃げ出した。

「なんで止めたの? 将君」

「そうですよお兄様、あれは正当防殺だよ？」

「はじめて聞いたよ。そんなの……」

人殺しをしそうだったというのに、全然反省してない二人を見て、将来が少し心配になるが、今回は自分が情けないため、叱ることはできない。

「そういえば凜、お前家どこなんだ？」

思い出したように凜にきく、転校してきたということはどこかに家があるんだろう。

「ああ、それはついでからの楽しみ」

「別に楽しみにしてないです」

「はは……はあ」

こいつらが仲良くする日なんてくるんだろうか？

相変わらず睨み合ってる二人を見ながら溜息を零す将であった。

震・ヤンでれ…夕食…(前書き)

遅くなりました。学園祭の準備忙しいです…

震・ヤンでれ…夕食…

「ここか」

辿り着いた凜の家は、将の家の前に建っているマンション

「…ってうちの前かよ!」

「うん」

眩しい笑みを放ちながら返事をする凜とは反対に、静香は心底嫌そうな顔をしながら、

「最悪…」

と呟いていた。

「それはこちらの台詞です」

「ふん」

「こいつらめんどくせえな」

「ん?」

なんとか二人が仲良くする方法がないか考えていると、凜が制服の端をちよいちよいと引っ張ってきた

「あの、将くんにお願ひがあるんだけど」

「なんだ？」

凜は少し脅えながらゆっくりと言った。

「今日夕飯食べにいつていい？」

「ダメにきまつてるじゃない」

俺じゃあないぞ

「あなたには聞いてないわ」

「まあまあ、別に飯くらいいいじゃないか」

なんとかまた戦闘になることだけは避けるため、落ち着かせる。

「む……お兄様がそういうなら」

そついいながら渋々引き下がる静香。

「じゃあとりあえず家入ろうか」

そつ言つて3人で家のチャイムを鳴らした。

現在家のリビングです。簡単に説明すると、今リビングではとても悪い空気が充満していた。

おかしいぞ、俺の計画では、

『ただいま、千鶴さん』

『お帰りなさい将くん、あら？ そちらはお友達？』

奥からエプロン姿の千鶴さんが出迎えてくれた。

『うん、幼馴染なんだ』

『あらそうなの？ 良かったら夕飯食べていって』

のはずだったのに…

「ただいま、千鶴さん」

「お帰りなさい将くん、あら？ そちら生「ミニ」？」

奥からエプロン姿の千鶴さんが出迎えてくれた。

「っつていや違うよ！ 幼馴染ですよー！！」

「そうなの？ まあ何でもいいけど早く帰ってくださいね」

そんな身もふたもないことを言う千鶴さんを何とか説得し、一緒に夕飯を食べることになったのだが、

「……」

無言の食事が続いております、正直味がわかりません。

「お？」

そんなとき、こんな状況でも一心不乱にオムライスを食べている弟の顔に、ケチャップがついているのを発見する。

「実、ケチャップついてるぞ」

そう言っただけに、頬についていたケチャップを掬い、自分の口に運ぶ。

「ありがとうございます！ お兄ちゃん！」

「ああ」

むむ、やはりケチャップは少ししょっぱいような、――――

パキンッ

金属音？

突然の金属音に、その音の方向を見ると、にっこり笑った表情の3人が、スプーンを握り折りながらこちらを見ていた。

「え〜と……ああ！ 新しいスプーンとって来るな！」

はい、すみません逃げました。

結局その空気に耐え切れなくなった将は、その場を立ち上がりそそくさと離れていった。

「っていうかスプーン折るって…俺の周りには普通の奴はいないのかよ。…しかもさりげなく千鶴さんまで」

とりあえず人数分のスプーンを持ち、リビングに戻ると、さつきまでと違うことに気づいた。

なんでみんな類にケチャップついてんだ？

さつきまで何もついていなかった顔に、赤い点がついている。

「ほい、静香、スプーン」

「ありがとうございますお兄様」

「それと、ケチャップついてるぞ？」

「一応気づいているとは思いますが、報告しておく将、しかし静香は、

「どこですか？」

「いやそこに」

「どこですか？」

何回いっても”どこですか？”のみ。あくまでわからないを通すらしい。

もしかして取れ、とっているのだろうか？

「ほい」

ようやくそのことに気づいた将は指で掬うと、ティッシュで指を拭く。

「…ありがとうございます」

あれ？

これであっていると思った将は、全員分のスプーンとケチャップ掬いをおこなったが、三人とも不満があるのか、少し覇気を出しながらもくもくと平らげていく。

なにか失敗したか？

「あ、実また」

自分の失敗を考えていると、また実がケチャップをつけている。そのケチャップを取りなめる。

バキンッ！！

「……ご馳走様」

すごい音をたてて立ち上がる3人、その3人の手元を見て冷や汗が流れるのがわかった。

スプーンが皿を貫通して机に突き刺さっている。

怒らせないようにはしよう。そう決意をあらためた瞬間でした。

震・ヤンでね…夕食…(後書き)

感想くれたらうれしいです…

震・ヤンでれ…風呂…（前書き）

すいません、新人賞に出すための原稿を書いているため、どうしてもそちらに手が出てしまいます。

震・ヤンでれ…風呂…

「……は？」

「だから、今日ここに泊めてっていったの！」

はい、というわけで大変なことになってしまいました。現在の状況を説明すると、飯を食い終わり、割れた食器をゴミ箱に捨て終え、リビングへと戻ってきたわけなのですが、なぜか凜が突然今日一日泊まりたいと言い出した始末です。

「一応聞くけど、なんで？」

え？ という顔をした凜は、うんと言いながら可愛らしく顎に指をあてながら考え、何かを思いついたように、パツと指を立てた。

「引越してきたばかりで荷物がいっぱいだから？」

「なぜ疑問系、まあでもそういう理由なら一日くらい……」

そついいながら視線を横へと移動すると、握り拳を手で覆いながら、黒い笑顔を見せてきている2人の女性がいた、

「…よくな……」

もう一度視線を正面に戻すと、今度は目元に涙らしきものを大量に詰め込んでいる凜さんのお顔が見える。さてこの場合、俺はどちらを取るべきなのだろうか、どちらをとっても危ない気がしてならないが…かと言って、埃まみれの部屋で寝かせるなんて可哀想だし

な。

「まあ、今日ぐらいはいいかな」

「本当！？ やったー！！！」

将の一言に、体全体を使って喜びを表す凜、それに対し、頭に角でも生えそうな程危険な二人が、こちらに向かって反論の声を上げた。

「お兄様？ その考えは間違っていると思います」

「将さん？ それはよくないと思いますよ？」

「まあそう言うとは思ってたけどさ、今日一日ぐらいは良くないか？」

しかしここまで来たら引き戻るわけにも行かない。なんとか二人を説得できそうな理由を探しだす。

「そうだな……じゃあ明後日の日曜、二人の買い物に荷物持ちで着いていくとかは？ 前服買いに行くとかいってただろ？」

「……まあ幼馴染が困ってるなら一日ぐらい仕方ないかしらね……」

「そうですね。お母様」

どうやら買い物付添いで手を打つことができたらしい。ほっと胸を撫で下ろすと、時間を確認する。

もう9時か……明日も学校だし、そろそろ寝る時間か

時間を確認した将は、明日の授業を思い出しながら、今だに喜んでいる凜を指さす。

「おい凜、先風呂入れよ」

「何言ってるんですか!?! お兄様!」

お前が何言ってるんだよ……

「ゴキブリ、略してGが風呂なんかに入ったら風呂が汚れてしまします!」

「寄生虫、略してKが何を言ってますか……」

「何よそれ、あなた、Gの分際で私のほうが汚いと言いたいのか?」

「あれ? 気づいてなかったのか? Kには視力すらないのかしら」

静香の乱入によってまたバトルが発生しそうだ。というかGとかKとか、とても女子がする会話とは思えない。学校の連中にも見せてやりたいくらいだ。

二人の言い争いを見かねた将は、溜息を一度つき、二人の横を通り、冷蔵庫からイチゴオ・レを取り出して、直接飲みだす。

「うめえ」

「お兄様」

「将君」

さるげなく最近ハマっているイチゴオ・レを飲んでいると、後ろから声をかけられた。

ようやく終わったか？ 飲みながら振り返り、

「ぶっー！」

口に含んでいた液体を横に噴射してしまった。仕方ないだろう？ なぜか二人が下着姿という露出狂になっていたんだから。二人はお互い睨み合いながらこちらを向くと、

「どつちのほうが綺麗？」

「は？」

そう聞かれ、素直に二人を見比べる。

静香はその雪のような肌に溶け込むような白いフリルのような下着を着ており、もはや肌と一体化しているのかと思うほど美しく、可愛らしさも秘めている。さらに腰まで伸びた漆黒の黒髪が全体を引き立たせ、どことなく大人っぽさもかもしだしている。

対する凜は、特に変わっていない、薄いピンク色の下着を身につけていた。こちらの肌も負けずをとらず白く美しい、しかも凜はクォーターで、白く長い髪をピンクの小さいリボンでちょこんと結んであり、そのせいもあるためか、静香よりも体が白く見える。静香と違い色が全体的に薄いので、可愛らしさが強く出ていた。

って！ 俺は何をまじで考えてんだ！？ 正気に戻れ俺！

「そんなのいいから、さっさと二人で風呂入れー！ー！！！」

「きゃっ、ちよっ、お兄様！」

「将君！」

有無を言わず二人をリビングから追い出すと、扉を閉め、その場へぺたんと座りこむ。

「疲れた…」

お兄様にリビングから追い出され、仕方なく私はこのGと共に浴槽へとやってきた。

幸いにも将の家の風呂はそれなりにでかいたため、二人くらいなら無理をしなくても入れるくらいの余裕はある。

「それにしてもなんで私がこんなGと…」

「それはこっちの台詞です」

「でもお兄様のお願いなら仕方ありません」

「…そうですね」

そう言うとお互いそっぽを向きながら下着を脱ぎ、静香から先に風呂場へ入った。

ざばぁーと頭からお湯をかぶり、長い髪を後ろで巻き留め、風呂へと入る。

「ふう」

それからすぐに凜も風呂場へと入ってきた。こちらをちらっと見るとすぐにそっぽを向き、髪を洗いだした。

「む」

そしてその姿を見ていたは凜は不覚にも、凜の純白の白い髪を綺麗だと感じてしまった。

私としたことが、あんな髪を綺麗だと思っんなんて…

自分自身を叱咤しながらも、もう一度見てみる。

私のほうが綺麗なのは当たり前ですが…お兄様は白い髪のほうが好きなのでしょうか…

考えながらジーンと直視していると、ふいに視線が重なり、すぐにそっぽを向く。髪を洗い終えた凜が、静香から少し離れた位置から湯に浸かった。

しばらくの沈黙の後、十分に温まったのか、凜が立ち上がり、静香に声をかけた。

「あなたは…将君のこと…」

「愛しています。この世の誰よりも」

はつきりとそう言い切ると、凜の眼光が静香の姿を捉え、そして

口を開いた。

「なら……私はあなたを殺すかもしれないわ」

それだけ言うと、凜は風呂場を後にした。残された静香は、扉を見つめながら、自分が微笑んでいるのがわかった。

殺す？ 私を？

「面白い……」

震・ヤンでれ…風呂…（後書き）

さてさて、更新が遅れてしまいました…、しかし気づいたことがあります。この作品書きやすい…

正直4時間もあれば一話はあつという間でしたすいません！

しかし、友達にも言われたのですが、感想もらったら少なくとも1週間以内に更新しろと言われてしまいました。

これからモンハン3rdも出るって言うのになんて無茶を…

でも友達の言うことがもったもなので、感想、アドバイスをもらったら1週間以内に対応しようと思います！ 来なくても、まあそれなりに更新していきます。一応終わりは考えてあるので、最後までよろしくお願いいたします。

では次話、震ヤンでれ…深夜…で会いましょう

震・ヤンでれ…深夜…

「んじゃ、おやすみ」

「お休みなさい」

現在将は就寝につくところだった。風呂から出た凜が、一緒に寝たいと言い出したときはどうしようかと思ったが、なんとか2時間かけ説得し、静香の部屋で寝るように説得した。部屋の前で二人と別れ、自室に入り、すぐに電気を消し、とりあえずベッドにダイブ。

「今日は色々ありすぎて疲れた…あいつら…少しでも仲良くなれば…」

そこまで考えたところで、将は睡魔に負けてしまった。

深夜2時、愛しのお兄様に、

(凜と一緒に寝てやってくれよ)

といわれてしまったので、百万歩ゆず…：…らずに、お兄様からもらった枕で手を打った。そんなこんなで現在静香の部屋では、二人の美少女が睨み合っていた。

「で？ どちらの方がお兄様を愛してる、という話を始めてから3時間が経過しています」

「そうですね」

静香たちは11時にこの部屋に来てからずっと、どちらの方が将は愛してるか、ということについて講義しあっていた。だが正直、お互い同じようなことを繰り返しているだけで、終わりがまったく見えてこない。本当なら開始10分で戦闘が始まりそうだったが、隣の部屋で将が寝ているため、言い合いしかできない状況であった。

何か良い方法はないかしら？ と少し凜が思考を働かせると、ある妙案が彼女の頭に閃いた。

「ゲームで決着をつけるって言うのはどう？」

「ゲーム？」

「そう、お兄様が最近ハマってる格闘ゲームで」

彼女が思いついた妙案とは、最近将は買ったという格闘ゲームの対戦だ。しかし、その妙案に凜は乗ってこなかった。

「そんなことで決めるようなことではないでしょう？」

やれやれと首を左右に振りながらあきれた素振りを見せる。ここまでは静香の予想通り、後は――

「――勝った方が、お兄様とキスできる――」

とても小さく、聞こえるか聞こえないかの音量で言うと、凜の体がぴくつと反応をしめし、

「……そのゲームはどこ？」

先程とは打って変わった態度の凜に、思わず口元がにやけるのがわかった。

「お兄様の部屋よ……」

「さあ、始めましょう」

なぜか勝手に兄の部屋に入った拳句、勝手に兄のゲームを付け、しかも兄の唇が賞品になっているなど、夢にも思わずに、将はただぐっすりと熟睡していた。

兄を起こさないために、音量はつけずにゲームを開始する。

「それ、次貸しなさいよ」

そう言ったのは凜、静香が今読んでいるのは説明書、お互いゲームなどまったくやったことのない初心者のため、とりあえず読んでおこうと考えた。

「ん……」

ぼいっと、読み終わった説明書を相手に投げつける。それを受け取った凜もまた、パラパラと流し読みをし、説明書を机に投げつけた。

「いい？ 一本勝負よ。勝った方がお兄様の唇をいただく、いいですね？」

「わかりました。あとで取り消しなんてなしですよ？」

「それはこちらの台詞」

お互いに軽く挑発的口調で会話しつつ、キャラを決める。

こんなGなんかには、絶対負けてなんかやりませんわ…

今ここに、伝説の対戦が生まれる…

二人が選んだのは、そのゲームの、言わば主人公的キャラと、そのライバルキャラ、お互いのステータスはほぼ同じで、どちらも万能キャラであった。

始まった直後から、お互いの会話が一切おきなくなった。ただただ将の唇を手に入れるため、このゲームに全てを捧げていた。

開始から10分、画面内のキャラは激しく動いているが、お互いのキャラは1ダメージも受けてはいない。それもそのはず、受けるはずがないのだ。このゲームには、受け流し、簡単に言えばギリギリでガードすると、ダメージは発生しないというものがある。これは上級者なら無意識に敵の攻撃に反応し、全国レベルなら8・9割はこのガードで防いでいる。

確かにこの二人は、今まで一度もゲームなどをやったことはない。そのため、コンボなどはまったくと言っていいほどできない。しかし、受け流しは別だ、これならば複雑な操作はいらぬ。彼女達は、相手キャラの手が突き出される瞬間、全て狙って受け流していた。高速で切りつける必殺技だろうが、見切り不能な一瞬の斬撃だろうが、全て目で見て防いでいた。

絶対に負けない…

彼女達の長い夜は、まだ終わらない。

「ん……」

朝か…、静香が起こしに来ていないということは、珍しくかなりの早起きしたのだろうか？

そんなことを考えつつ、眠い目をこすりながら体を起こした。

「ふあ〜つて、お前ら何人の部屋で勝手にゲームしてんだ？」

朝っぱらから、二人の美少女がカチカチゲームをやっているという、世にも珍しいもの見た将は、二人の元へと近づいていった。

「お〜い、聞こえてる？ っていうか何やってんだ？ お前ら」

まったく返答がない。二人はただじつと画面を見つめたまま、コントローラーを動かしていた。その後、声をかけるが、まったく石化の魔法でもくらったのか、まったく反応してくれない。

いつもなら、静かでもいいか、と思う将だったが、朝っぱらから無視を受けるのは、少しつらい。画面を見ると、お互いの体力はお互いにMAX、これなら消して平気か。そう考えた将は、ゲームの電源を引っこ抜いた。

「あれ？」

そこでようやく二人が、動きを出す。

「ようやく動いたか、どんだけハマったんだよ……」

「お兄様！ おはようございます」

「将君、おはよう」

「おはよう」

まさかここまで二人がゲームにハマるとはなぐ、でもま、これで二人も仲良くなってわけか。

「結局、決着はつかなかったわね。このK」

「まあ、あのままやってたら私の勝ちに決まっていたが」

前言撤回、相変わらず仲悪い。

獣のように唸りあう二人を、どうどうと落ち着かせる。

「あのままやってれば、お兄様の唇は私ものでしたのに！」

「何を言ってるの？ 寝言も大概にしなさい！」

「お前ら、寝言は寝て言え」

もはや止める気も失せた。まさか勝手に自分の唇がかけられているとは予想もなかったことだ。まったくこいつらは、と二人を睨んでいると、そこで将に名案が浮かんだ。

「なあ、その戦い、俺も入っていいか？」

「え？」

「お兄様も？」

突然の将の言葉に、二人が思わず顔を見合わせる。そんな二人を見てフツと将が笑みを零す。

「もし俺が勝つたら、お前らは仲良くすること、俺が負けたら、俺を一日好きにしていぜ」

「「乗った！！」」

将の提案に全力で乗っかると、二人は顔を洗うため、一度下へと降りていった。

「あいつら、昨日始めたばかりで俺に勝てるとおもってるのか？」

一人、勝ちを確信していた将は、肩ならしに少し練習しようとゲームの電源を付け直す。

「ん？ 対戦履歴？」

ああ、さっきのか

この格闘ゲームは、常にネットで全国に流れており、操作しなにかぎり対戦はネット公開されている。

「え？」

二人の対戦動画をちらつと見ようと思ったつもりだったが、その対戦動画の再生回数と、対戦時間を見て思わず顎が外れそうになる。

「対戦時間…7時間35分？」

恐る恐る再生を押し、数分だけ見ると、将はすぐにゲームを止めた……

「私が勝つに決まってるわ」

「もう一度顔洗いなおしてきたら？」

顔を洗い終わった後、尚も喧嘩しつづけながら、二人は将の部屋へ戻ってきた。

「お兄様、お待たせ…」

「？　どうかしたの？」

先に中を覗き込んだ静香の顔が無表情に変わるのを見て、凜もまた中を覗くと、そこには将の姿が消えていた。

「まったく…」

「将君つたら…」

「お仕置きだよ……」

二人が嫌な意味でハモった瞬間でした。

震・ヤンでれ…深夜…（後書き）

お待たせしました。今回は暴走させようと思いましたが、大人しめになつてしまいました。

えゝその大きな理由が… 実は最近、一時の気の迷いにより、神・ヤンでれという100% R - 18 作品を書いてしまい。こちらが大
人しくなりました。

ノクターンノベルスで投稿しようと思いましたが、冷静に考えると
かなり恥ずかしいので、胸の内に封印しておきますww

これからもよろしくねゝ、感想、アドバイス、要望など待ってます
！

震・ヤンでれ…搜索…

さて、将が家を飛び出し（逃げだし）てから約1時間が経過しようとしていた時、

ガタンツゴトンツ

現在将は、電車の中でゆったりと座り、適当に彷徨っていた。

「危なかった……」

そう小さくつぶやきながら汗を拭きとる。

あの後、家を飛び出した後、将は少し商店街を彷徨い、姿を消すのに最適な場所を探していた。そして思いついたのが、電車でもしらない土地に行くことだ。

これならいくら静香たちでも見つけることはできまい。

そう思った将が、ふっふっふとなぜか馬鹿みたいに含み笑いを上げる。

そんな将を周りの人々が疑視しているとも知らずに、笑う。

電車に乗って30分ほど経過したところで、将はようやく電車から降りた。そこは将がいたところに比べると田舎で、駅前だというのに周りに建物があまり建っていない場所であった。

「よし、さすがにここなら静香たちもおってはこれまい」

見知らぬ土地を見て、満足そうに頷く。

それにしてもこれからどうするか、見つからないのはいいとしても、少なくとも夜まではこの見知らぬ土地で過ごさないといけないわけだし、どこかで暇潰ししないといけないし、

考えながら改札を通り、もう一度辺りを見てみる。

「とは言っても、何も無いな」

うーん、と頭を悩ませていると、大きな看板のようなものを見つけ、近づいていく。

「この辺一体を表す地図か」

それは、この駅周辺を細かく記してある案内地図板だった。

さーと、何かいい暇潰しになるところはっと、

何か暇潰しできる場所はないか、地図を確認していく。

「お、ここは……」

すると一ヶ所に視線が止まった。

ここからそんな遠くないし、暇も潰せるな。

うん、と一回頷くと、地図を写めり、その場所へと足を向けた。

「ここを通ったのは間違いないみたいですね」

将を追うように家を飛び出した二人は、現在別々に探していた。

まったくお兄様だったら、急に逃げ出すなんて、よっぽどあのGのことが気にいらなかったんですね。

静香が訪れているのは商店街、先程将が通っていた道を歩いていた。

お兄様の匂いがさすがに薄くなってきていますね。このままでは探すのが面倒になってしまいます。急ぎますか。

そう言い聞かせ、再び鼻をぴくぴく動かす。静香は、愛しのお兄様の匂いを一日12時間以上嗅いでいるため、いつしか犬のように匂いを辿っていくという芸当ができるようになっていた。しかしそれでも、商店街では煙草や色々な人の匂いのせいで、将の搜索を困難に陥れていた。

そしてようやく将の匂いがどこへ向かったのかを特定させる。

この方角は……やはり駅ですか、まあお兄様の性格、思考を考えれば9割の確率でこの市には残っていないかと思っていましたか、

将の考えを知り尽くしている静香は、もうこここの市に将はいないとわかっていたが、凜のこともあるため、万が一ということを考え、確実にことを進めていたのだ。

行き先がわかった静香は、さっそく駅へと続く道に足を向ける。

「あ！ 何この子、めっちゃ可愛いじゃん！」

お兄様が駅に向かったということは、電車で移動したということ、急がないと面倒なことになりそうですね。

「ねえつてば！」

何だ？ この馬鹿。

突然進行方向を遮ってきた男の存在にようやく気付いた。多くの女性を周りにはびこらせているその男に、静香はゴミ男Aと名付けた。

ゴミ男Aは、茶髪で、耳にピアスなどをあけ、明らかチャライ格好をしていた。この商店街をよく通るのか、周りのお店のおばさん達が、厄介そうな視線を向けていた。

「なんですか？ どいてください。つてかどけ」

兄がいない時も、なるべく良い子に振る舞っている静香だが、今は将のこともあって機嫌が悪い。

しかし、そんなことまったく関係なしに、ゴミ男Aはしつこくナンパを続行してくる。

「まあそう言わずにさ、これからご飯食べに行かない？ もちろん俺の奢りで」

そんなことを気持ち悪い顔でほざくゴミ男Aに呆れ、無言で横を通り抜ける。しかしゴミ男Aは諦めずに、後ろから追ってきた。

「それならば、好きなもの言つてよ！ 何でもプレゼントするか
ら」

「……」

「あ、俺は大石 秀雄、あの大石グループの息子なんだぜ？ す
ごいっしょ？」

勝手に自己紹介をし始めたゴミ男Aは、自分が金持ちであること
を主張しながら付いてきていた。まあ眼中にないですが、

「だから行こうぜ？ な」

そう言つて、ゴミ男Aは腕を掴んだ。
掴まれた。

お兄様以外の男に、腕を……

掴まれた。

「消える」

その後の静香の対応があまりにも速かつたため、スローで流しま
す。

ヒュッ (振り向きざまに足払いする音) 0・5秒

ドッッ！……！ (浮いた体をけり抜く音) 0・2秒

バコン！（十メートル近く飛んだ後、ゴミ捨て場に頭から突っ込む音）1秒

以上により、目標は完全に沈黙。周りの取り巻き、店の人も声を失ってしまった。

「ゴミの分際でお兄様のものである私に触れるなんて……」

殺す。と言いたいところだけど、これ以上こんなところで油を売っているわけにもいかないし、先を急ぎましょう。

そして静香は、無言になった商店街を再び歩き始めたのだった。

「まったく将君ってば、逃げることないのに」

現在凜は、静香と違う道のりで商店街へとやってきていた。今は帽子を購入し、少しでも顔を隠して行動していた。

は、面倒くさい、けどこれくらいはしておかないと、すぐ声をかけられちゃうし。

そう、彼女はもと人気アイドル“TENSHEI”だ。なので変装なしで外を出歩くと、たいてい声をかけられてしまうのだ。

まあ変装といっても、本当に帽子を被るだけだが、案外それだけで気付かれないものである。

それにしても将君ったら、私がお金を貯めている間にあんなKに気に入られるなんて……まあかつこいいからしかたないかもしれないな

いけど、

凜の頭の中で将の妄想が広がっていく。

……えへへっ

「お母さん。あの人美人さんだけど顔がすごいよ?」

「しっ! 静かにしてなさい!」

周りからの奇怪な視線に、凜の緩みまくった表情が元に戻る。

はっ! 私としたことが、ついつい妄想に夢中になっちゃった。

さてと、とりあえず気配からこっちに来ていたことは間違いないみたいだけど、

口から垂れていたよだれを拭きながら、目の前の建物、駅へと入って行った。

改札のところまで来て、カードをかざそうとポケットを探る。

「あ、カードを忘れた……」

けどお金あるからいつか、確かキップ? とかいうのを買わないといけなかった気がする。

今までは、マネージャーからもらったICカードをかざすだけで通っていたため、切符の存在を名前だけしっていた。

そう考えながら隣を見ると、知らない人が小さい紙を通しているのを見て、確信する。

あの小さいのが切符、ということはあるこの機械で買ったんだ。

そこまで理解し、なんとか切符の購入機の前に立つ。画面に表示されている切符を迷わず押し、面倒なので一万円いれて一番高いものを購入した。

私はまた、大きなことを成し遂げたよ！ 将君！

一人で切符を購入したことに感動を浸ると、急いで電車に乗るため、もう一度改札へ向かうが、

「ねえ、君つてもしかしてアイドルのTENSHI？」

変なのに絡まれてしまった。

「違います人違いです。では急いでいるので」

そう言っつて穩便に済ませようとするが、通せんぼつするかのよつに男が前に立ちはだかる。

それを思わず殴り…：そうになるのを寸前で、

「だよね！ あ、じゃあこのあとデート、げふっ！」

止めずに腹に一撃を食らわせてやった。私をデートに誘つていいのは未来永劫将君だけだつていつのに何言つてんだコイツは？

腹に一撃をくらい気絶している男を、知らぬ顔で放置しながら切符を通して改札を抜ける。

待っててね将君！ 今迎えに行つてあげるから！

そして凜は階段を駆け上がる。

……切符を置き去りにしたまま……

震・ヤンでれ…恥…

「ここか……」

先程写メで撮った地図と、自分のいる位置を照らし合わせる。

ふむ、田舎にしては中々綺麗なゲーセンだな。

将が暇潰しに訪れたのはゲームセンターだった。最近改装でもしたのか、周りの古臭い建物と違い、このゲーセンだけ新しくできたように綺麗になっているのがよくわかる。

今朝の格ゲーの対戦を見て、少し特訓しようとおもっていたのだ。

よし！ここで少しでも腕を磨くため、練習して行こう。

ぐっと手に力を込め、意気揚々と自動ドアを潜って中に入る。まだ開店してから時間がたっていないこともあり、人っ子一人いない。やはり昔からあったのだろう、中はそれほど綺麗ではなく、煙草の匂いが充満していた。

そんなことをまったくせず、さっそく空いている対戦格闘ゲーム「レッドファイト」の席へと座り、百円を投入する。

それにしても、あの凜が転校してくるとは夢にも思わなかった。小学校の一年の時に知り合い、中学の時、突然引越した彼女は、その後まったく音信不通で高校まで上がっていった。

昔は仲が良かったのは覚えているが、転校してきてまで俺に会いに来る理由なんて普通あるのだろうか？

それにあいつら、初めて会ったはずなのになんであんなに仲が悪いんだ？

二人の仲がなぜ悪いのか、考えならレバーを動かしていると、画面にNEW CHALLENGERという文字が表示される。

げっ、なんか乱入入ってきた。まあでも、俺は都会で鍛えてっからな、こんな田舎野郎なんか一捻りにしてやるぜ！

ふん！ と腕をまくり、レバーをがっちり握り、ボタンに手を添える。

相手が選んできたのは、自分と同じキャラ、力比べのつもりなのだろうか。将は対抗心をMAXにして、対戦が始まるのを待つ。

ファイトッ！

そして…試合開始のゴングが鳴り響いた。

……

……

…

結果だけ伝えよう、負けました。

いやぁもうなんていうか、見事にカウンターのオンパレードでした。こちらの動き……っていうか思考を完全に捉えた見事なカウンター

だった……

周りに人がいなくてよかった、なんて惨めなことを考えつつ、さりげなく相手側の通路へと回っていく、せめて顔だけでも覚えて帰ろうと思ったからだ。

そう、さりげなく、ちらっと見るだけだ。ちらっと一瞬顔を

チラッ

そこにいたのは、こちらを見ながらニコニコ笑っている

「よ」

明がいた。

「って！ よ、じゃねーよ！！　なんでこんな辺境の地にあるゲイセンにお前がいんだよ！」

「辺境ってお前……別にそんな離れてねえし、今日ここに来たのは、コイツの大会がここで開かれるからだよ」

「大会？ レッドファイトの？」

「そそ」

返事を返しつつ、明が華麗にコンボを決めていく。

「お前ってこんなにこのゲーム強かったのか……」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ 俺前回全国大会三位までいったんだぜ？」

「まじで！？ お前が！？」

「ああ、ところで今日はお前一人なのか？ あのブラコン妹はどうした？」

素で大驚きするこちらの反応が楽しいのか、明が含み笑いをしながら質問をしてきた。その質問のおかげもあってか、先程まで忘れかけていた今朝の記憶がよみがってくる。

きつと今頃探してるんだろうか……なぜだろう、見知らぬ土地にいるはずなのに、もう既に近くまで来ているような気配を感じる。もし万が一見つかったりしたら

「死……」

「詩？」

疑問符を浮かべる明に、何でもないと言いつつ、自分自身を落ち着かせる。とにかく、今日は一日おとなくしておこう、大丈夫見つからなければOKだ。

「お前本当に大丈夫か？ 顔真っ青だぞ？」

「へ？ ああ、平気平気、それより大会は何時からなんだ？」

「11時から」

時間を聞き、壁に掛けられている古い丸時計を見ると、時刻は10時ちよい過ぎ、あと1時間近く時間が余っている。

正直、このままだ一人で逃げ回っているより、友人と一緒に居たほうが楽しいな。

「なあ、開始までまだ時間あるみたいだし、少しUFOキャッチャーとかみないか？」

「おう、いいぜ、行くか」

そう言って明はゲームを放置して立ち上がりだした。話を聞くと、どうやら彼の持ちキャラじゃなく、やっている意味がないのだという。

「だったら乱入なんてしてくんないよ！」と思わず殴りそうになるのをこらえ、二人でUFOキャッチャーの台が置いてある場所へ移動するのだった。

一方その頃、凜は電車の中で、携帯を眺めていた。ピンク色の小さい携帯の画面には、地図が映し出されており、その上に小さい点が一つ、ぴかぴか光っている。

まったく将君ってば、またゲームセンターなんて体に悪い所に行つて、

はあ、とため息をつきながら携帯を閉じる。

もうわかったかもしれないが、今携帯で見ているのは、将に付け

られている小型の発信機だ。凜は静香とは違い、超人的な力ではなく、機械の力を利用して、追っているのだ。

これなら無駄に動きまわらずに、楽に居場所を知ることができる。

それにしても……視線を感じる。

チラッと周りを見てみると、みんながこちらを見ている。

やっぱり気のせいなんかじゃないよね……

一応帽子は被っているが、やはりそれだけでは足りなかったのだろう。ほとんどの人が、ひそひそと話し始めた。

「ねえ……やっぱりあの人」

「HIMEなのか……？」

「似てる……よなあ」

通学中の学生、サラリーマンたちがこちらの顔を覗こうとしてくるのがわかる。下を向いて帽子を深く被っているが、それでも時間稼ぎにしなければならないだろう。

将君のいる駅までまだ10分くらい掛かるし、このままだとばれるのも時間の問題、どうしよう……

正直このままやり過ぎし、ばれても知らん顔というのが手っ取り早いが、昔それをした時にひどい目にあっているのだ。

あれはアイドルになって2年目の仕事帰り、タクシーがつかまらなかったのもので、一人電車で帰っている時、たまたま帰宅ラッシュの時間帯に乗ってしまった凜は、ぎゅうぎゅう詰めになりながら、目

的地に着くまでじっとしていた。

しかし、残り一駅の時に、人とぶつかった衝撃で、着けていた帽子とサングラスが外れ、周りの人々にばれてしまうという事件があったのだ。

その時は、ほぼ全員が握手やらサインやらをねだり、一斉に押し寄せてきたのだ。

もちろんそれだけなら別に仕方ないと思う、だがこれは始まりに過ぎない。

次の駅で下車した凜は、押し寄せてくるファンを片づけるため、面倒くさいが一人一人対応し、高速でサインを書き、握手をしたのだ。

そして表れたのだ……女性の敵が……

まあ簡単に言つと痴漢だ、凜が笑顔でサインを書いている隙をついて、凜のお尻に手を伸ばしそして 血まみれになった。

触れられた瞬間、回し蹴りで顔面強打、そのまま仰向けになった男の腹に踵落とし、男は重傷で即座に病院行き、駆けつけた警察に正当防衛を訴えたが信じてもらえず、結局この事件は裏で処理され、表にはさらされなかったが、その後の活動に支障をもたしてしまっただ。

そして肝心の凜は、“殺さなかっただけ嘛だと思っただけ……世の中上手くいかないものね。”といった感じに、まったく反省の色を見せていなかった。

まあこんなことがあったわけで、なるべくばれることはしたくない、しかも今はもう事務所をやめてしまったため、裏でもみ消すこともできないから尚更。

さて、どうしましょう。

そういう考えてるうちに、周りの視線は集まる一方、次の駅で一旦降りる？ いや、それだともしかするとあのKに先を越される可能性もある。それだけは阻止しないと、妻として、でも

「あの

このまま見つかったらもっと時間を食うことになるかもしれないし、

「あの

でもでも

「あの一！

「ああもう！ さっきからうるさいわね！」

あ、ばれた。

目の前に居たのは、自分より少し年下っぽい男の子だった。つい条件反射で返事をしてしまい、正面から顔を見られてしまった。こちらを見る少年の目にきらきらと眩しい光が宿ったような気がした。

「やっぱり！ あのアイドルのTENSHEIですよね！？」

「え、ち、違います！」

どうしよう、このままだとまた前みたいに……

予想通り、話を聞いていた人が次々と席から立ち上がり、こちらに集まってきた。

「え、でも……」

な、なにか良い言い逃れはないか？ な、なにか……

咄嗟に言いわけを考えるが、この場を凌ぐ良い言いわけを思いつかない。人間誰しも、追い詰められているほど過ちを繰り返すものだ。

「こ、これは……コスプレなんです……！」

自分でもさすがにないと思う、辛い言い訳をってしまった。周りのみんなもわざわざと慌てているのがわかる。

こうなったら……もう殺るしか

そう考えがまとまりかけた時、少年が歓声をあげた。

「す、す……いい！」

「え？」

少年の予想外の反応に、その場一同唖然とした表情になった。

「こんなに似てるなんてすごいですよ！ あ、もしかして今はやりの特殊メイクって奴ですか？」

けど、この流れに乗るしかない！

「そ、そうなんですよ、いや、大変でしたよ、このメイク、80万も掛かりましたから」

「へ、気合い入ってますね」

少年と意味不明の会話を続けると、周りの人々が拍子抜けしたような表情をする。

「なんだよ、コスプレかよ」

「よくよく考えたらこんなところにいるわけないか」

「迷惑だな」

と言いつつ、みんな元の場所へと戻って行く。そしてなんとか目的の駅まで辿りつくことに成功した。

ここまで無事に来れたのも、この子のおかげね。感謝しないと、

「じゃあ私ここだから、ありがとうね」

そう言って降りると、後ろから少年の声が耳を打った。

「うん！ がんばってね、コスプレイヤーのお姉さん！」

その言葉で、ホームの人々から嫌な視線が集まった。

私はもしかして、大事なものを失ってしまったのかもれない……
その後、早く出ようと改札に行ったが、切符を取らなければいけないことを知らず、結局時間を取られる凜であった。

――

電車に乗って40分くらいたったころだろうか、ようやくお兄様の匂いが残っている駅を発見した私は、その後も匂いを辿り、ある一件の、見た目綺麗なゲームセンターに辿りつくことに成功した。

しかし、いざ中へ入ろうかと思った時、ある不愉快な事態が発生した。

あと少しでお兄様に会える、それなのに

「「なんであなたまでいるのよ」「」

静香と凜の声がシンクロした。

そう、いざ入ろうと思ったら、真横に凜が立っていたのだ。

私のほうがお兄様を愛しているのに、こんなGなんかと同等なんてなにかの間違いにきまってる。

しかしそう考えているのは凜と同じ、二人は沈黙を保ったまま、しばし肉食獣な眼で睨みあう。

「とりあえず中に入りませんか？」

「そうですね」

このままでは埒が開かないと踏み、提案を出すと、凜も同じこと思っていたのか、あっさりした返事が返ってきた。

睨みあつのをやめると、今度は相手の様子をつかがいながら、二人同時に自動ドアを潜った。

しかし睨みあっていたのもそこまで、中に入った途端、二人共、店内をキョロキョロと見渡し出した。

どこですか？ お兄様

「あ」

見つけた！

向こう側の角のUFOキャッチャーに立っている、お兄様の姿を、静香はしっかりと捉えた。

何かを取るうとしているのだろう。台の前で、ガラスの中にある商品を左右から真剣な表情で覗き込んでいる。

その姿に鼻血が出そうになりながらも、二人はゆっくりと駆け寄って行き、声をかけようとして 気付いた。

誰かがいる？

お兄様の傍に、別の人間が存在することに気付いた二人は、よく目を凝らして見てみると、もう一人男が立っていた。

将の隣でカチカチと携帯をいじるその姿に、静香は見覚えがあっ

た。

あいつは確か……同じクラスの明とかいう奴だったかしら？

なんとか記憶から取り出す。二人は友人という関係を、静香も承知はしている。毎晩携帯のメールチェックの時には把握してるし、学校にいる時は8割がた絡んでくる男だ。

気を使ってくれる部分も多々あるため、静香もそれなりに気に入っていた男だったが、今はそんなこと関係ない。

今はただ、二人で一緒にゲームセンターで仲良くしていることが重要なのだ。

静香は相手が男だろうが、子供だろうが、将に近づくものは敵とみなす、今までは、兄に近づくものを全て先に潰してきたが、あの事件以来、静香も少し丸くなってしまったようだ。

こんなことになるなら、もっと早く手を打っておくべきだった。その後悔の念を感じながら、明を睨みつけるが、向こうはまだこちらに気づいていない。

あの男……

そしてこの瞬間、静香の中で、

……生きてることを後悔させてやる。

明が、気をきく奴からお兄様に近づく害虫Bに変わった瞬間だった。

おまけ？ 宮代 静香（前書き）

なんか部屋掃除したら、これを書く前に書いた絵が見つかったので貼っておきます。名前の漢字が違いますが気にしないでください。

おまけ？ 宮代 静香

ミヤシロ
宮代 静香 シズカ

17歳 高校2年生 将より誕生日が2か月遅いため、妹

好きなもの 将、将に関するもの

嫌いなもの 将に近づくもの（基本全般）

得意なこと、もの 投擲（特に包丁） 殺人術 将の追跡

苦手なこと、もの 母

将来の夢 将との幸せな新婚生活

呼び方 お兄様

頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗の完璧少女

いつ殺してもおかしくないほど兄を好きでいたが、最初の工場事件の一件後、将が人を気づつけることを極端に嫌っていることを知り、計画していた、母、弟暗殺計画を未遂に終わらせ、なるべく兄の前では人を殺さないよう努力している。

将を好きになった理由は、過去のとある出来事が原因

それでは画像を貼ります

ペタリ

> i 1 6 3 3 9 | 2 2 5 2 <

おまけ？ 宮代 静香（後書き）

ちなみにこれを書いたのは自分です、へたくそですいません（><）

これを書き始める前に書いた絵なので、感じがすこし違っていますが、勘弁してください。一応他のキャラも書いてありますが、あまり自信ないので、また今度貼るかもしれません。では！ これからもよろしく！ 感想くれるとありがたいです。∴ やっぱりもう一回書き直そうかな……

震・ヤンでれ…ゲーセン…

将は先程からUFOキャッチャーに熱中していた。

少し前、明と共に見てまわっているとき、「お菓子でも食べないか？」という話になり、せっかくだからUFOキャッチャーで取るうということになった。

「よっしゃ！ あと一回で取れる！」

そういつて財布の小銭入れから百円玉を挿入する。このセリフも、既に何回いったか覚えていなかった。

鋭い目でお菓子を睨みつけ、UFOキャッチャーを操作する。1のボタンで横……2のボタンで縦……

STOP！ きたこれえー！ 今度こそ頂いたぞ！ 巨大蟹煎餅！

止まったは、ほぼ真ん中のJSUTな部分！ アームが獲物を捕えるようにゆっくりと落ちて行き、商品をがちりと掴む！ そしてゆっくりと持ちあがっていき

ぽとっ

っという音を出して落とした……元あった位置に、

「くっそー！ 次こそは！」

乱暴に財布の小銭入れをあけ、中から百円を取り出そうとしたが、出てくるのは十円玉ばかり、しかたない、ここは明に借りておこう。そう考え後ろにいるであろう明に手だけ差し出す。

「明、悪いけ百円貸してくれ、後で返す」

それにしてもこれどうやって取るうか、もう少し手前を持ちあげたほうがいいのか？

「おい明、百円」

あれやこれや考えながら、明に催促をかけるが、いつになってもコインが手に乗ることはなかった。遂に痺れを切らし、文句を言ううと後ろを振り返える、そしたら、

「おい、お前なにやってんだ……よ？」

明が二人の美少女に縄で縛られてました。

……

どれくらいの時間が経っただろう、時間にしてまだ1分経ったか経ってないくらいなのに、1時間近くずっと固まっているような、そんな違和感を覚えた。

目の前でおこなわれているのは、静香と凜が初めて二人の共同作業、明を縄で縛りあげるといふ奇怪なものだった。明は口にまで縄を回され、恐怖のあまり顔が凍りついている。

「お前ら！ 俺の親友に何するんだ！ とつとと離れる！」なんて

ことを言えるわけもなく、ただ黙ってこの状況を切り抜ける方法を考える。主に明を犠牲にする過程で、

しかし時は止まりはしないのが現実、1分が1時間というのも感覚に過ぎない。そうこう考えてるうちにも、明の縛りあげが終了間際のところまできている。

こうなったら、ナチュラルにこの場を立ち去るしかない。

「あ、やっべ、俺としたことが、お金をおろしてくるくるの忘れてた。いや〜おっちょこちょいだな〜俺」

「座って」

「はい……」

とさりげなくその場を離れようとしたが、静香の一言で断念、冷たい冷たい床に正座させられてしまった。

静香と凜は、明の体を鼻以外全てを縄で多い尽くすという、なんとも気持ち悪いとした言いようのないもの作ると、それを地面へ転がした。生きてるんだらうか、

「で、お兄様」

「私たちから逃げて、こんな家畜となぜこんなところにいるんです？」

そう言って転がした明？ に二人が足をがしつと乗せていった。その目には、もはやなんの感情が含まれているかわからない目の色をしていた。

「さあ、言ってみてください、返答しだいによつては……」こちらにも考えがあります」

フツと微笑み静香の笑顔は、可愛いと想像させるよりもはやく、恐怖を想像させてくれた。

やばい……本格的にまずいぞ……

だが、こんな状況で良い言いわけなんて生まれるわけがない、というかもはや目の前の二人が怖すぎて、マイナスにしか思考が行かなくなつてきている。

俺、ここで死ぬかも、精神的な意味で……

「どうしたの将君……はやく答えて？　じゃないと家畜が大変なことになつちゃうかもしれないね」

これ以上！？　と言うツツコミが出てきたが、今はツツコンではいけないタイミングだとして、黙認、そして遂に、最後の時が近づこうと……

キン

その時、ひとつの店内放送が流れ、一瞬静香達も気をそらした。

“え、これから、第7回レッドファイト公式大会を開催したいと思います。受付されてない方はお急ぎください”

……来た！！　良い言いわけが思いついた！

「聞いてくれ二人共、実は今日、この大会のことを思い出してこつまで来たんだ」

「私たちに黙って……ですか？」

「それには理由があるんだ」

「それはなんですか？」

「それは……」

チラツと縛りあげられている明みて、心の中で合掌。すまん明……

「明から、早く来ない俺のことを犯るぞっていう脅迫電話がきたからなんだ」

「ん！？ ん、んー！」

その言葉に、今まで一言も発せなかった明が驚きの声を上げ、否定するように体をばたつかせながら何かを訴えている。

というか鼻以外が縄で包まれているため、非常に気持ち悪い

「黙りなさい」

すると突然凜が明の腹に向かって足を落とした。見た目ゆくつりとおろしていたが、あたった瞬間、明が鼻で「ブツ」という下品な音をたてぴくりともしなくなった。

「ではお兄様、少し待っていてください」

「すぐに戻るから」

二人はそういうと、仲良く二人で明を持ち上げ、運びだした。

「え？ あの、どこいくんですか、お二人さん」

「「山」」

こんな時だけ綺麗に八毛らないでほしい……

「ち、ちなみに、なぜ？」

すると二人は、またも綺麗な声で答えてくれた。

「「埋めるため」」

「それ殺人じゃねーか！！」

「大丈夫ですよお兄様」

将の言葉に、静香が名案を出す。

「深く埋めればいいんですよ。1キロくらい穴掘れば平気です」

聞いたのが間違っていました。

「全然平気じゃねーし！ というか1キロってどれだけ時間かけて掘るんだよー！」

「二人だし……5分くらいじゃないかな」

凜が“ねえ”みたいに静香に視線を送り、静香も“そうね”みたいな顔をする。

「5分!? それもはや機械よりも全然早いよ! じゃなくて埋めるのダメ! 禁止!」

「「え〜〜」」

え〜〜つてお前ら、ていうか本当に仲良く見えるなこいつら、姉妹みたいに見えるぞ。まったく嬉しくないけど、

「じゃあ海ポチャ? でもここから海は少し遠いですよ。お兄様」

静香が困りました。みたいな顔をし、凜は「タクシー呼ぶ?」とか言い出す始末。

「え? なに、もう殺すこと前提に話進めてるの? だめだよ? 殺しちゃ」

将の言葉に、二人は一瞬きよとん、という顔をした。

「なぜです? こいつはお兄様を犯ろうなどという羨ま……いかがわしいことをしようとしたんですよ?」

「そつだよ。この芋虫は将君を犯りまくるっていつすばら……ひどいことをしようとしたんです。死んで当然だよ」

「待てお前ら、言葉の途中途中で決して聞き流していけない単語が

聞こえたぞ」

「そんなことないです（よ）」

二人はきりつとしながらこちらを見るが、口から涎が垂れていた。

こいつらとはもう少し……いや、かなりの距離を置いたほうがいいのかもしいな。

それにしても困ったことになった。今の二人はもはや一心同体くらのシンクロ率をほこっている、何とかしないと明の命がリアルで危ない。

「じゃあ山で」

「そうね」

いつの間にか相談を終えた二人は勝手に納得し、将を無視して出口へ向かう。

まずい……何かないか？ 何か……

しかしもうそんなことを考えていられる時間がない。将はほぼアドリブで、思ったことを口にした。

「俺は、どんな理由でも、人の命を奪う奴は大っ嫌いだ」

ゴトン。

何かを落とす音は響き、見ると、二人がいつの間にか明を落とし、

縄を一瞬で回収していた。

「本当です。人の命は大切にしなければいけません」

「当たり前だよな」

先程とは打って変わり、二人は命の大切さについて語りだしていた。

さつきまで人を殺そうとした奴らが言うか？ でもまあ、無事に終わったならこれでいいか。

「でも、こいつとも色々と決着をつけなくてはいけません」

「そうだね」

そう言うと、今だ意識を取り戻していない明の頭を蹴り、意識を帰還させた。

「あれ？ こいつは」

まるで死の淵から帰ってきたような声を出す明。

「よつやく起きましたか……ではみなさん、行きましょう」

静香はそれだけ言うと、さっさと歩きだしてしまう。凜もそれに続くように歩き始める。一方将と明は、何が何だかわからないと言った状態になり、聞きなおす。

「は？ どこに？」

静香はゆっくりと振り返ると、笑顔で答えてくれた。

「もちろん、レッドファイトの大会受付に決まってるじゃないですか」

なぜだろう、このときなぜか、体に悪寒が走るのを感じたのだっ
た。

おまけ？ 新崎 凜（前書き）

今回は新崎 凜のイラストを公開いたします。下手ですが参考になれば幸いです

おまけ？ 新崎 凜

新崎 凜 しんさき りん

17歳 高校2年生

好きなもの 将、歌、映画

嫌いなもの 将に近づく雌、静香、苦いもの

得意なこと 歌、演技、棒術

苦手なこと 父

将来の夢 静香と同じ、将との幸せな家庭生活、子供は3人はほしい。

呼び方 将君

頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗

というか容姿を説明していませんでしたね。容姿はストレートで腰まで伸ばしている、母が外人の関係で髪が純白、胸はC

小学校から中学まで将と一緒にだったが、将とある約束のようなことをしてからアイドルになる。大まかな目的は金集め、将と不自由のない生活を目的としていたからだ。しかし最近になって、静香が将を狙ってきたため、アイドルをやめ、将にアタックするために帰っ

てきた。

イラスト貼ります。ちなみにアイドルをしていた時のイラストです。

べた

> i 1 6 5 0 5 | 2 2 5 2 <

おまけ？ 新崎 凜（後書き）

後書き 感想をいただけるとうれしく思います。

最近、伝助NO32さんの小説、「あなたは科学を信じますか？」のヒロインも勝手ながら書かせていただきました、ありがとうございます。

この程度の絵でよかったですらいくらでも書かせてもらいます。今後ともよろしくお願いいたします

震・ヤンでれ…大会…

「なあ将、俺どうしちまったんだ？ 縄で縛られた辺りから記憶が曖昧でよくおぼえてないんだが」

結局今は全員で受付に移動中、どうやら明は蹴られたショックで記憶が曖昧になっているようだった。

「ああ、お前が暴走して凜に襲いかかったから、返り討ちにあったんだよ」

「ああ……ってええ！？ 俺そんなことしたのか？ まじで!？」

信じられないという表情で驚く明。

「ああ」

すまんな明、だが真実を知るよりはそっちの方が楽なはずだ……

「まじか……俺そんなことしたのか……」

明はショックだったのか、肩を落として落ち込んでしまった。

「やっぱり謝ったほうがいいよな……」

「そうだな」

「俺、ちと謝ってくるわ」

そう言つと、緊張した面持ちで、前を歩く凧に近寄つて行く明。

「あの、新崎さん」

「なんですか？」

明の声に反応した、凧がゆっくりと振り返る。

「あの、すみません。色々と迷惑を賭けてしまつたみたいで」

そう言つて明が頭を下げて謝罪すると、凧は天使の笑顔のような顔でほほ笑んだ。

「いいですよ」

明がほつと安堵の息を吐くと、凧が「でも」と言葉を付け加え、笑顔のまま続けた。

「将君は私の夫ですから」

「……え？」

凧はそれだけ言い終えると、前を向き直り、すたすたと前を歩いていく。一方明は言われた意味がわからずに、ただ立ち尽くしているようだった。

「俺……何か間違つてたか？」

「気にするな、行くつ」

立ち尽くす明を慰めるように肩を叩き、二人のあとを追いかけるのだった。

受付に行くと、十数人の様々な年齢層の人が大会のエントリーをしていた。

「なあ静香、なんで大会なんかに出るんだ？」

なんとなく理由はわかっているが、念のため確認をとっておこう。

将の素朴な質問に、静香はあっさりと答えてくれた。

「そんなの今朝の続きに決まってるじゃないですか、お兄様」

やっぱりそうだったか……

「ということは、この大会で優勝した人が好きなことを一つ命令できるってことか？」

「そういうことです」

それを確認すると、つい溜息をついてしまう。さすがにこれ以上この二人から逃げることはできないだろう。だとすると俺が勝つかないわけだ……

「おーい、早くしないと受付終わっちゃうぞー」

話に関係のない明は、一足先に受付を済ましたらしく、呼びかけてきてくれた。

「では行きましょう」

「ええ」

二人が己の願望のため、やる気満々なオーラを出しながら歩いて
いるのを見て思った。

これはもう……覚悟を決めるしかないと……

「では、こちらにプレイヤーネームをお願いします」

三人で受付に行くと、店員から紙とペンを渡された。

プレイヤーネームとは、大会で使う偽名のことだ。ちなみに将は
いつも使っている「將軍」という名前を記入する。

それにしても……

書き終わった紙を渡し、自分たちの周りを見渡してみると、みん
ながこちらに注目しているのがわかる。。

「あの子たちめっちゃ可愛くない？」

「近くにいるの彼氏か？」

「それはないだろ」

やはりというべきか、静香と凜はものすごい注目を集めていた。
本人たちはまったく気にしていないようだが、正直居心地が悪い。

「これでお願いします」

視線の嵐に攻撃されていると、そのすぐ後に静香たちも登録を終え、トーナメント表が完成するのを待つ。

そして待つこと五分、トーナメント発表の時、白いホワイトボードに一人一人のプレイヤー名が、アミダ状の線に書かれていく。

…力男

…ハンバーグ

將軍

あ、俺だ。対戦相手は

神聖なるロリ

……俺の最初の相手大丈夫かよ、あんな堂々とロリコン宣言するなんて……あるいみ勇者だが、

そんな時後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「お、最初の相手は将か」

「っってお前かよ!!」

明がロリでした。

「あれ？ 知らなかったのか？」

「お前ロリコンだったのかよ!!」

「うっん少し違うな、俺は神聖なロリコンだ」

「神聖なロリコンってどんなロリコンだよ!」

「それは素人に言ってもわからないと思っぜ?」

自信満々に言っ明を見て、なんかつつ込む気が失せた。

「もういいや……」

明の知りたくはない秘密を知ってしまった。まあ隠してないみただけど、隠してた方がよかった。将の中の明が変態ロリに変わった時だった。

そんなロリコン明を放置し、残りのトーナメントのメンバーを確認する。

無双

将は私の夫

パン屋

ラーメン醤油

無敵艦隊

将の妻

……

「おい、これはなんの羞恥プレイだ?」

明らかにおかしなプレイヤーネームを指さしながら二人に問う。

「何が?」

静香と凜は、ほぼ同時に頭を傾げる。

「何が？　じゃねえ！　あれどう考えてもおかしいだろ！　しかもこれだと俺が二重結婚みたいになってるし！」

しかも高校生で！

そんな暴走しかけている将の頭に、静香がやさしく手を乗せる。

「安心してくださいお兄様」

「何を？」

「お兄様は私の夫です。あんなGごときに私はしません」

「いやそこじゃないよ?!　俺が言ってるのは」

話を理解していませんでした。

「Kの分際で私に勝とうって言うの？」

そこでまた間違いを理解していない凜が乱入し、静香に掴み掛かって行く。

「あなたみたいなGなんかじゃ、お兄様が汚れるだけよ。早く消えなさい」

「将君がKなんかの相手をするわけじゃないじゃない。無駄な希望は捨ててさっさと他の男にでも寄生しなさいよ」

とても女同士の口喧嘩とは思えない迫力に、周りの一般人たちが距離を空けていくが、二人はまったく気にしないまま睨みあう。

「とりあえず今日で白黒はつきりさせてやるわ」

「当たるのは最後みたいね。ま、あなたが負けてなければの話だけ
ど」

二人はふんつと言うつと、自分たちの試合の台へと歩いていった。

まさか俺……負けたら結婚させられるのかな……

将は心に深い重みを抱えたまま、自分の対戦台へ移動した、

「それではこれより、大会を開始します」

そして店員の合図と共に、俺たちの戦いが始まった。

震・ヤンでれ…帰宅…

合図と共に、モニターに映し出された二人のキャラクターが激しく動き始めた。空中、地上、で激しくガードと攻撃が繰り返されている。

二人が共通しているのは、小パンしか出さない。ガードは全て当たる寸前、投げ抜けはCPU以上ということだ。

投げ抜けに関しては、投げられるときに出てくるビックリマークのアイコンが見えないほど高速な投げ抜けだ。

というか良くゲームが反応してると思うよ。

この大会は2回戦方式で、先に二本勝ちした方の勝利という、まあ普通の大会ときほど変わらないのだ。

大会中、二人の威圧か何かのせいなのか。周りの観客まで黙りこんでいる。ふつうはこんな戦いがあったら動画を取ろうとする奴とが出てきそうだが、誰も何も言わず、ただ黙って試合の行く末を見守った。

ってかこの戦いは終わるのか？

今だライフの減らない二人を見て、溜息を零す将であった。

「……では、今日の大会はこれで終了します。ありがとうございました。」

店員のお礼の言葉で大会は締めくくられ、終わりを迎えた。

まあ結局、決勝戦の結果は

「あと少しで倒せたんですよ？ お兄様」

「それはこっちのセリフです」

二人が両腕にしがみ付いて喧嘩をしている。

結果は引き分け、二人は結局タイムアップという結果になり、お互いのノーダメージのため引き分け。勝者はなしだ。

ということとは、あの賭けも必然的になくなるわけで、俺にとって
はこれ程いい終わり方はなかったと言える。めでたしめでたし

「もしかしてお兄様。 “よかった、賭けはなしか” とか思ってい
らっしゃいますか？」

「え？」

なんで分かった？

「顔に出てるよ将君」

凜に指摘され、思わず表情を硬くした。

「まあでもほら、勝者は結局いなかったわけだし、あの賭けはなし
でしょ？」

「何を言ってるの将君？ あの場合は二人が優勝っていうことにな

るんだよ？」

「そうです。ですからあの約束は健在ですよ」

「は？ いや、俺二人のお願いなんてかなえられないし」

色々な意味を含めてね。

「大丈夫です、二人の願いが同じなら、不本意ですが一緒に問題ありません。」

「私もかなり嫌だけど、それしかないなら仕方ないから我慢する」

嫌ならやめろよと思いつつも、二人は勝手に話を進行させていく

「一応聞くが、なんだ？ そのお願いって奴は……」

すると将の言葉に、しがみ付いていた二人が同時に見上げて言った。

「「デート!!」「」

……デート？

？ デート？ 喧嘩勃発？ 病院行き

この三つが頭の中に思い浮かぶ。

行きたくねえ!!

そんな将の考えに感づいたのか、じつと凜が見上げてきた。

「もしかして将君、今行きたくないなんて思った？」

「いや……そんなこと……ない」

本当はそんなことあるんだが、凜の上目使いが妙に可愛いと思っ
てしまい、つい顔をそらしてしまう。それに気付いた静香に腕に力
を入れられ、痛い思いをしてしまった。

「じゃあ決まりですね。今度の土曜日に開始ということ」

結局流されるまま、デートの日程は決まってしまった。俺将来確
実に尻にしかれるだろうなと感じながら、帰りの道を歩いていく三
人。

その中で、将はただ一人感じていた。

周りの視線……痛いです。

あれから時間が経過し、せつかなので色々デパートを見て回っ
たりしていると、いつの間にか夜の7時になったところだった。

ちなみにロリコンはは修行するらしく、バイト代を全ておろして
再びゲーセンへ行ってしまった。

今はようやく駅に着き、自宅に向かって歩いている時だった。

「すみません。今日はこれから用事があるので、ここで別れさせて

もらいます」

言いだしたのは凜であった。あと少しで家に着くと言う時に、唐突に凜が腕から離れてそう言った。

「さっさと消えなさいよ」

「静香、そんなこと言うなよ。でもこんな時間にどこに行くんだ？」

鋭く冷たく言う静香の頭をコツンツと叩きながら、凜にその理由を窺う。

「うん、少し野菜を買いに八百屋に」

「ああ、そういうことが、ならまたうちで食べたらどうだ？」

どうせ千鶴さんのことだから、文句を言いつつ作ってくれるだろう。

一番の問題である静香は、「今日はもう頭洗いません……」とか汚いことを言っているの、ほおっておけば問題ないだろう。

「うづん、今日はやめておくわ、明日のご飯のこととかもあるし」

本当に残念そうな顔をしながら頭を下げる静香。

「そっか、なら仕方ないな。また明日学校で会おう」

「はい、では」

笑顔で別れを告げると、凜はゆっくりと歩いて行った。その背中を見届けると、自分達も再び帰路に着いた。

「ほら、いつまでもぼーっとしてないで俺達も早く行くぞ」

いつまでも頭を撫でている静香を置いて、将はゆっくりと歩き始めた。

その後、家に帰るまで、静香はずっと外で放心状態だったらしい。

凜は将達と別れた後、商店街を突き抜け、真夜中の学校へと訪れていた。

「みんな集まってくれましたか？」

場所は校庭、目の前には、たくさん男子達がうようよと群がってきている。これらの人間は全て凜の親衛隊、もといファンクラブだ。

「突然どうしたの？ 学校なんか呼び出したりして」

「それには理由があります」

誰もが思っていることを代弁する男子に、凜は先程から持っているものを前に突き出し、場を静寂させた。

持っているのは槍のような棒だ。凜はその棒を地面に突き立て、まっすぐにファン達を見て、切り裂くような鋭い声で言った。

「これより……桐ヶ谷 将を殺します」

男子達は、一瞬凜が何を言っているのか理解出来ていないようだった。だがそんなこと知らないといった感じで、更に言葉を進める。

「誰かこの中で、私と一緒に桐ヶ谷 将を殺しに行きたい。もしくは半殺しにしたい人がいたら、前に出てください」

この言葉に、全員顔を見合わせ不思議に思ったが、一人の男子が前に出ると、我先にと、次々と男子が前へと出てくる。

普通に考えれば、昨日までべったり将にくっついていた凜が、突然こんなことを言い出すなんておかしいと思うはずだが、今のファン達には、日頃から溜まっている将への恨み、妬みで、そんなことを考えもしなかった。

そして1分も経たずに、ほぼ全員が前に集まり、和気藹藹と話をしていた。

「どうやってやりましょうか」

「とりあえず3回は殴りたい」

「俺も！」

などの会話だ。

そんな男子諸君を、凜は笑顔で出迎えた。

「集まってくださった皆さん、ありがとうございます」

ぺこりとお礼を言うと、そのまま集まったものたちの人数を数え始める。

ざつと百ちよいくらいかな？ どうしよう、思ったより時間借りそうだ。

もう一度見渡して、仕方ないか、と諦めを付けると、地面に突き刺した棒を勢いよく引き抜き、構えを取った。

「ではこれより、将君の敵を排除させていただきます」

凜の言葉に、敵がえ？ という表情に変わるのが分かる。

そして凜は目の前にいる敵に向かって突っ込んでいったのだった。

震・ヤンでれ…風呂…

…なんでこんなことになったんだろう

将は湯船につかりながら考えていた、この状況は一体なんなんだろうと

チラツと横目でシャワーの方を確認する。

「お兄様、髪の毛洗ってくださいよ」

そこには、生まれた姿のまま座っている義妹の姿があった。

こんな状況になった理由を知るには、今から少し前、帰ってきた直後に振り返る必要がある。

「ごちそうさまでした」

帰宅した将達は、ご飯を作って待っていてくれた千鶴さん達と共に、夕飯と一緒に食べた。

お腹もいっぱいになったし、そろそろに風呂にでも入るかな。

そう考えながらお腹を押さえていると、実もご飯を食べ終わったように、食器を台所へと運んでいた。

そこで最近実と風呂に入っていないことに気付き、台所に届くくらい音量で声を出す。

「実ゝたまには一緒に風呂入ろう」「ブーーーーー!!」

実を風呂へ誘おうとしたら、反応したのは実ではなく、目の前でお茶を啜っていた静香で、全力で顔面にお茶シャワーをお見舞いしてきた。

おかげで机も顔もお茶だらけにされてしまった。

「突然何を言い出すんですか！ お兄様！」

「お前は一体何を吹きだしてんだよ！」

近くに置いてあったティッシュで顔と床を吹きながら静香を睨むと、顔を赤くしながら静香も睨み返してきた。

「そんなことより！ 実君とお風呂なんて！ 何考えてるんですか！？ まさか……シヨタ……なんですか？」

「ちげーよ！！ 別に兄弟でお風呂入ってもなんの問題ないだろう！」

相当なシヨックを受けたのか、静香は俯き、何か一人でぶつぶつ言いだしてしまった。

それにしても静香のせいで顔がベトベトだ、先に風呂入っちゃうか。

「静香、実が来たら先に入ってるって言っといてくれな」

何かにやにやしだした静香にそれだけ言つと、リビングを出て、風呂場へと移動した。

浴室に辿りついた将は、服を脱ぎながら、先程の静香を思い出して何か嫌な予感がよぎるのを感じた。

だがさすがに顔面べとべとでの状態でベッドに入るほど、将は落ちぶれていない。

服を脱ぎ終わり、風呂場へ入ると、さっそくシャワーを顔面から思いっきりかぶった。

「あゝ気持ちいいゝなんか何もかもどうでもなってくるなゝ」

そのまま髪と体を念入りに洗ってから、風呂へとダイブ。

「あゝやばいなゝこれ」

つい声が漏れる。足から全体に伝わってくる温かさの虜になりなりそうだ。

お湯の気持ち良さに心も体もゆったりしていると、ガチャツと浴室の扉が開く音が聞こえた。

そういえば実と風呂に入るのなんて久しぶりだなゝ、静香達が来る前は結構一緒に入ることはあったけど、最近は全然なかったからなゝ

昔明に「お前ブロンコ過ぎだろ」と言われたことがある。あの時は否定したが、今考えると間違いではなかったかもしれない。

ガチャッ

そんなことを考えているうちに、浴室から

「お邪魔致します」

実ではない体が出てきた。

「……」

良く見ると、体は雪のように白く細くて、それでも出ているところはしっかり出ており、美しい長い黒髪が垂れ下がっていた。

そして不意に目が合った。

「そんなに見つめないくださいお兄様」

「し、静香!？」

ポツと顔を赤くする静香、ここまで見て初めて理解した将は、慌てて背を向ける。

「なんでお前が入ってくるんだよ!」

「なんでって、いいじゃないですか別に」

「いやどう考えても良くないでしょ!？」

「でもお兄様が言ったんじゃないですか」

俺が言った？

テンパリながらも必死に考えるが、まったく覚えがないので聞き返して見る。

「何を」

すると静香は即答で、

「兄妹だからおかしくないって」

と答えた。

「いやそっちの兄妹じゃないから！ こっちの兄弟、弟の方だよ！」
「どういふ勘違いしたらそっちの変換がされるんだ！？」

今さらながら妹に恐怖した将だった。

「そうなんですか？ まあいいじゃないですか、兄妹なんですから」

しかし静香の方はまるで気にしないような素振りを見せている。
更に、何かを思いついたように「あ！」と声を出す。

「もしかしてお兄様……意識してます？」

「し、してねえ！」

明らかかな挑発だったが、ここは否定しておかないと、兄として、

兄妹として色々ダメになりそうなのでしかたがない。

もちろんこのことを予想していたが如く、静香はうれしそうな声で話を続ける。

「なら別に問題ありませんよね」

「いや、でも」

それでも何とか止めようとする将に、それを聞いた静香は喜びから一転、悲しみに満ちた声で言った。

「それとも私とは兄妹ではないと言っんですか？」

おそらく演技が混ざっているのだろう、わかってはいるが、もはや将には彼女を止めることはできなかった。

と、まあ結局今に至るわけなんだけどね。

「お兄様聞いてますか？」

「自分で洗いなさい」

「え〜〜」と文句を言う静香はしばらくの間ぶ〜ぶ〜言っていたが、将が無視を続けると、すぐにまた別の手口で仕掛けてきた。

「仕方ありません……」

はあ、と後ろから静香の溜息が聞こえてくる。

やっと諦めたか？

「叫びますか……」

「やめてくださいー!!」

悲痛の叫びが風呂場に届きに、静香は確実に将を嵌めていく。

「じゃあ、わかってますよね？」

こんなところで悲鳴なんて上げられたら、俺の人生大変なことになってしまっ。

静香の言葉に、将は小さく頷くことしかできなかった。

「じゃあとりあえずこっち向いてください。それでは洗えないですよ」

「お前ちゃんとタオルとか巻いてるだろうな？」

「大丈夫ですよ」

本当か？ と少し疑うが、このままだと本当に叫ばれるかもしれないので、おそろおそろ振り返ってみる。

するとそこにはタオルを巻いた静香の姿が

「ってタオル小せえ!!」

「何か問題が？」

振り返って目にした静香の体には、本当に大事な所しか隠していない、スポーツタオルが乗っているだけ、胸の部分は長い髪でなんとか見えないで済んでいた。

「なんでそんなタオル使ってるんだよ！」

しかもスポーツタオルの中でもかなり小さいし！

「え？ 困りましたね。これ以上小さいのはいんですよ」

「なぜそつちに発想がいく！？」

どう考えても静香の脳の処理はバグっている！

「あ、ハンカチがありました！」

おお！ と少し驚いた顔をする静香を見て、

「……もう髪を洗わせてください」

将はさっさとこの生き地獄を終わらせよう諦めた。

震・ヤンでれ…弁当…

「お願いしますね」

静香の背後に周り、腰にタオルを巻いて少し冷たい椅子に座ると、前から手渡されたシャワーとシャンプーを受け取る。

とりあえずあまり意識しない方向で、静香の背中にかかっている長い髪を触る。

めっちゃサラサラしてるな……

いつも綺麗だとは思っていたが触ってみるとまた違う、指を通すと、絡め着くように指の間をすんなり通り、一本一本に光沢があるのか、髪の毛全体が神秘的な美しさを醸しだしていた、

さらに匂いも全然違っていた。いつも自分のと同じシャンプーを使っているはずなのに、静香の髪からは、甘い華のような香りが漂ってくる。

女の髪ってみんなこんなもんなのか？

「お兄様、触ってから既に5分32秒経過しているのですが、まだくんかくんかしますか？」

「してねえ！」

静香の言葉に一瞬ドキツとし、急いでシャワーで髪を洗い始める。髪を一通り水で濡らすと、手にシャンプーを適量出し、静香の頭を

ワシャワシャと洗い始めた。

「お兄様、ひとつ質問よろしいですか？」

「質問？」

「はい、あのG……新崎 凜とはいつ知り合ったんですか？」

「どうしたんだ、突然？」

「ただ気になっただけです」

突然の質問に少し戸惑いつつも、昔のことを思い返してみる。

「あいつと出会ったのは中学一年の時だったな、席替えの時に席が隣だったんだよ」

「それだけですか？」

「うーん、多分今は平気だと思うけど、昔はあいつ周りから孤立してたんだよ」

「孤立……ですか？」

以外そんな反応をする静香、それもそのはず、ただでさえアイドルをしていた凜が、昔は一人孤立していたなんて想像もつかない。

「んでさ、あいつ髪白いじゃん？ それのせいで周りの男子から色々言われてたわけよ。まあ好きな子いじめだったと思うんだけどさ」

そこまで聞くと、静香は一人納得して頷く。

「それでお兄様が助けて友達になった……ということですか」

「まあ助けただってというのは大げさだけどな、そういうことだ」

「……まったく……それが決定打ですか……」

はあ、と溜息をつく静香、将は何が何だかわからぬまま、とりあえず静香の髪についた泡をシャワーで綺麗に洗いながした。

「ほれ、終了」

「ありがとうございます」

「んじゃ、俺はもう上がるな」

「はい」

静香にはいさぎいいなと思いつつ、将は風呂場から出て、壁に掛かっているバスタオルを手にとって、体を良く拭いく。

風呂から突然飛び出してこないかをチラチラ見ながら体を拭き終えると、洗濯機にバスタオルを突っ込み、将は自分のパジャマへと手を伸ばし 止めた。

理由は簡単だ、なんてったって自分のパジャマの上に、見慣れないピンクの布地が置いてあったからだ。更にそれを見つけた瞬間に、静香の声が耳に響く。

「それ脱ぎたてなんで使ってください。お礼です・」

彼女のパンティーでした。

「いらねえし使わねえよ!!」

「あ! あと使ったら洗わないで返してくださいね!」

「だから使わねえって!」

叫びながらそのピンクのパンティーを洗濯機の中に叩き込むと、急いで着替えて、自分の部屋へと飛び込んだ。

何考えてんだよあいつは……

溜息をつきながらふらふらとベッドに座ると、静香のことを考え始める。すると先程見た裸体が脳裏に浮かびあがった。

だーーーー!! 何考えてんだ俺は!

頭の中の想像を振り払うように頭をぶん回すと、逃げるように布団の中へと逃げ込む。

悶々とする気持ちを抑えながら、将はそのまま眠りについていった。

翌日、相変わらずの騒がしい朝を送って学校に出発すると、玄関の前では凜が待っていて、一緒に学校に向かうことになった。もちろん静香は不機嫌だったが、

「それよりあなた、昨日何をやっていたの？」

それは珍しく静香から凜へ向けての質問だった。何かを探るような目で凜の顔を見据えているが、一方の凜は無表情だ。

「質問の意図が読めませんね、私は昨日買い物をして帰っただけですよ？」

「そうだぞ、昨日それで別れたじゃないか」

何を言ってるんだ？ 静香の奴。

なぜかこちらの顔を一度確認すると、静香は呆れたように溜息をついた。

「……はあ、何でもありません」

結局その後も他愛ない話していると、すぐに静香達は学校へと辿りついた。

階段を上り、二階にある自分達の教室に足を踏み入れる。するとそこで最初に足を踏み入れた将が、あることに気付いた。

「おはよう〜ってあれ？ 人少ないな」

教室の中を見渡すと、そろそろチャイムが鳴る時刻だと言つのに、クラスは今だ半分ちよい、しかも良く見ると、いないのは男子のようだ。

「なるほど……」

呟いたのは静香だった。まるで全てを悟ったように目を細めると、そのまま自分の席へと座ってしまった。

続くように将と凜も自分の席へ座ると、静香に問う。

「なあ、なるほどって、何かわかったのか？」

「いいえ、何でもないですよ、お兄様」

「そ、そうか？」

「ええ」

それだけ言うといつも笑顔を向けてくる静香に、これ以上何もきけなくなってしまった。

その後すぐに入ってきた先生の話によると、このクラス以外の多くも男子生徒が風で休んでおり、中には通り魔に怪我を負わされた生徒もいるらしい。

話を聞いた生徒たちは皆ざわざわと騒ぎ始めた。それもそうだろう。これだけの人数が同時に風を引いたなんて、普通に考えたらまですぐありえないだろう。

「ならなぜ休んでいるのか？」

皆一様にそれを考えるが、誰もそんなものわかるはずもなく、昼休みにになると、ただの面白い話題へと変わっていた。

「お兄様、お昼ご飯にしましょう」

「ああ」

いつものように、静香が青い四角い弁当箱を将の机の上に差し出し、将もそれを受けとろうとするが、

「将君、実は今日は私もお弁当作ってきたんです」

「え？」

なんですと？

その横に赤く丸いお弁当が並べられる。二つにお弁当を前にした将は、とても嫌な汗を流しながらお弁当を見比べ、正面を見た。

うわゝ

予想通り、二人は威圧たつぷりの笑顔で見つめあっていた。

震・ヤンでれ…忠告…

このままではまずいと感じ、教室内にいるであろう明を探そうとあたりを見渡すが、食堂にでもいつているのか、姿が見当たらない。

いつもどうでもいい時にいるくせに重要な時にどこ行ってんだあいつー！

「申し訳ありませんがGさん、お兄様は私のお弁当を食べるので忙しいので、あなたのまずいお弁当など手をつける暇がありません」

「それはあなたではなく将君が決めることだよ。まあ私のお弁当とKのお弁当とじゃ話にならないと思うけど」

「では決めてもらいましょうか」

「ええ」

二人は睨みあつのをやめると、丁寧にお弁当の包みを解いた。

「おお」とクラス全員が思わず感嘆をついた、もちろん将もその一人だ。

どちらのお弁当も見栄えよく整っており、栄養バランスを気にしているのか、野菜などもしっかりと織り込まれている。

そんな二人の弁当の大きな違いはたった一つ……

肉か

魚か

それだけだった。

具体的になんて料理かはわからないが、静香の料理には肉が、凜の料理には魚がメインのおかずになっていた。

っていうことは今日の気分で選んでしまえば問題ないか。

そう考えた将は、ただ簡潔に、肉か魚、どちらが食べたいかを考え始める。

「そうです、ただ勝負するだけではつまらないので、勝った方は賞品をもらえることにしましょう」

その突然の提案をしたのは静香だった、まるで勝利確信しているような、挑発的な余裕を見せながら凜を見る。

「いいですね、で、その賞品とは？」

相変わらず当の本人に関係なく話が進められていくが、まあお弁当を作ってもらったんだし、たまにはいいかなとも思う。

「将君の脱ぎたてのパンツで」

「ちょっとまって静香」

「良いでしょう、望むところですよ」

「望まないで！」

思わぬ賞品内容に、隼の如く異議を申し立てるが、やはりスルーの形で終了。

「お兄様のパンツを持って帰るのは私です」

「いいえ、私が持って帰ります」

「え？ 何？ 俺この場で脱ぐの？」

「この年で変質者の仲間入りですか？」

「さあお兄様」

「どっちか選んでください」

そう言って二人がお弁当を前に差し出してくる。

どつする？

昼ごはんを食べるのを我慢するか？

それとも腹いっぱいになって変質者への道に行くか？

二つのお弁当を睨みつけながら、思考をめぐらせること数秒、

「つて！ そんなの考えるまでもねえ！」

「お兄様！？」「将君！？」

将は全力で走りだした、扉を乱暴に開け、二人声が聞こえないよう耳を手で塞ぎながら、廊下を駆け巡る。

俺はまだ健全でいたい！！

飛び出した将を見て、静香は追いかけることもしなかった。いつもなら地の果てだろうが一瞬で追い付いて捕まえることができるが、今日はそうしない。

「それで？ 何か用？ 将君を遠ざけたりして」

隣から聞こえる凜の声、全て見透かしている物言いに驚きもせず、静香は向き直る。

「聞きたいことがあります」

「聞きたいこと？」

「今日の男子生徒大量欠席のことです、あなたですよ？」

一応周りの生徒に聞こえないよう、声の音量を下げて凜に問う。
すると彼女は特に気にした様子もなく「ええ」と答える。

やっぱりGの仕業でしたか……

「じゃあもうやめてください、そういうこと」

静香の言葉に、彼女は一瞬、豆鉄砲を食らった鳩のような顔をした。

「なぜ？ あいつらは将君に危害を与えようとしてたんだよ」

そんなことは百も承知だ、凜がお兄様を思う気持ちは、恐らく本物であるう、認めたくはないが……

「そうだとしても……お兄様は優しい人だから、それを知ったらシヨックを受けてしまう」

「だからやめると？」

「そう」

顎に手を当てると、凜は考える姿勢を取り、質問を飛ばした。

「ではもし、将君に危害を与えようとしたらどうするの？」

「もちろん手を出せばボコします」

「……つまり、手を出さなければ」

「手は出さない」

「なるほど」

理解したと言わんばかりに頭を縦に振る。

「とりあえずは言うことを聞いておきましょう」

「当然です」

話を終えると、広げた弁当箱を再び布に包みこむ。

早く追いかけないと、お兄様がご飯を食べる時間がなくなってしまふ。

きちんとお弁当を包み終え、レジヤシートを抱えると、お兄様がいるであろう屋上へと向かおうと、教室の扉に手をかける。

あ

そこであることを思い出し、同じく弁当を持った凜の方を振り返り、一言

「あなたには手加減しないでですけど」

突然の言葉に、凜も微笑混じりに言い返す。

「それは私のセリフ」

それだけ言うと、二人は廊下を異常な早さで駆け抜けていった。

震・ヤンでね…忠告…（後書き）

すみません、今回は短めです。新しいバイトのせいで毎日くたくた
です……

震・ヤンでれ…発見…

時は流れて放課後、今頃教室では帰りのホームルームをやってるんだろっとなあとか思いながら、白い天井をじっと見つめる。

現在将がいるところは、保健室。

別に病気になったわけでも、ましてや怪我をしたわけでもない。ただそう、少し食べ過ぎただけだ。

昼休み、将は自らのパンツを守るため、爆走し、逃げ込んだのは音楽準備室。だが、そこにはすでに二人がレジヤースートを用意しており、弁当も展開済み。

もちろんその場から離脱を試みたが、CGも顔負けの速さで座らされてしまった。抵抗しようとしたが、静香から、さっきのは冗談だからたくさん食べてください、と言われた

疑いながらも、走りまわって強烈になっていた空腹には叶わず、大量にあった弁当の中身を一人で完食。

ここまでではよかつたんだが……

お腹もいっぱいになり、珍しく二人の争いも……少しありながらも、昼飯は終了。仲良く3人で教室に戻ろう！ そんな感じで廊下を歩いていると、食い過ぎで少し、少しだけ腹が痛くなり、擦っていると、それに気付いた静香が声をかけてきた。

「お兄様？　どうかしました？　まだ足りませんでしたか？」

「さすがにそれはない……いや、少しお腹が痛いだけだから」
「がばっ！」

「は？」

一瞬のうちに視界が90度回転したと思ったら、静香と凜が協力して将を横に抱え、丸太を運ぶように、保健室へ連行。

保健室の先生はどこかに行っているのか、無人の状態だ。

「おい、本当にちょっとお腹が痛いだけだから、わざわざ保健室に来なくても……」

「何言ってるんですか！ お兄様！」

「そっだよ将君！ おとなしく寝ていて！」

そう言っつてベッドに無理やり寝させられました。

「だから大袈裟だつて、別にベッドを使う必要は っってお前ら！
なんだこのベルトは……」

体を起そうとすると、いつの間にかベルトでベッドの上に縛りつけられていた。手も足も巻かれているため、首しかまとも動かすことができない。

「というか本当に人間技じゃない。」

「だってお兄様、こうでもしないと無理やり授業に出ようとするだろし」

静香の言葉に凜もしきりに頷いて、同意の意思を示す。

「当たり前だ！　というかこんなことでいちいち保健室で縛りあげられてたまるか！」

「G、ここは一時休戦にして、お兄様の薬を買いに行きましょう」

「スルー！？」

「仕方ないけど、それが今私たちのできる唯一の手ね」

「いや、そんなことよりもこのベルト外す方が先だよ！？」

「じゃあ早く行きましょう」

「そうね」

最優先目標の一致を確認するように、静香と凜は顔を見合わせ、うん、と一回だけ頷く。

「え？　ちょっと待って、このままで置いていくのか？　そうなのか！？」

二人は将の言葉が聞こえていないのか、あつという間に扉の向こうへと消えてしまった。

「……まじかよ……」

とまあこんな感じで今は保健室に監禁中なわけだ。静香達ならきつと早く戻ってきてくれるだろう。

「ほんと、早く帰ってきてくれることを願うよ」

だってあいつら、カーテン閉めて行かなかったし……

つまり今、この瞬間、誰かが入ってきたら、間違いなく将の人生は終わりを告げることになるだろう。

それだけはなんとしても阻止したい。動けないけど……

だが、この時すでに、将の人生は終わりの時を迎えていたのだ。

ガシャンッ！

突然の音にびくりと反応し、まさかと思いつつ、嫌な予感120%の力で重い頭を持ち上げてみる。

そこにいたのは、大きなウサギのぬいぐるみを持った、小さな女の子が、机の寄りかかるように立っていた。

すると女の子は、体を小刻みに震わせ、大きな瞳を潤ませ、口を金魚のようにパクパクと開け閉めを繰り返しながら、片手でこちらを指さした。

「へ、変態さんがいますう！」

将の人生が終わりを迎えた瞬間でした。

震・ヤンでれ…発見…（後書き）

遅くなりました。春休みに入ったので、毎日書いていこうと思います。感想あったらうれしいです。よろしくね。

震・ヤンでれ…DEAD…

女の子は小さな悲鳴を上げ、ペタンツと地面に尻もちをついた。

「あ、ごめっ」

「へ、変態さんがしゃべりました〜!」

「変態じゃねええ!…!」

「ひっっ!」

将の怒声に、びくりと体を震わせると、ウサギのぬいぐるみに隠れるように小さく丸くなった。

「ああ、ごめん! でも本当に変態じゃないんだ!」

「変態さんじゃ……ないですか?」

女の子がおそろおそろぬいぐるみから顔をのぞかせてくる。

よかった、なんとか誤解は解けそうだ。

「うん、違っよ」

「じゃあ、ド変態さんですか?」

「そうそう、って違っよ! 普通だよ、ノーマルだよ!」

「ふ、普通の人はそんなことしません」

ぐっ！ 確かにその通りだ。もし立場が逆だったら間違いなく自分も同じことを言うに違いない。

「これにはその……海よりも深い事情があるんだよ」

「海よりも深い……？ 事情に深さなんてあるの？」

「え？ そこ聞く？ どうだろう、考えたこともなかったけど……」

「そうなんですかあ」

「うん……ってそんなことはどうでもいいよ！ それより事情を聞いてくれ」

なんなんだこの子は……

少しおかしい女の子に翻弄されながらも、将はなんとか事情を説明した。話終えると、女の子はゆっくりと立ち上がりながらも、疑いの視線を向けてきた。

「怪しさ150%です……」

そりゃそう簡単に信じてもらえるわけないか。

「そ、それよりさ、君はなんでこんなところに来たの？ どこか具合……は良さそうだし、怪我でもしたの？」

将は誰かを呼ばれたら困ると考え、なんとか女の子をこの場にと

どめようとする。

「わ、私はその……帰り道が……わからなくて」

「は、帰り道？」

女の子は恥ずかしそうに顔を赤くしながら、小さく頷いた。

「帰り道って……いつも帰ってる道でしょ？」

「いつもはその……車でお迎えがくるから」

「そうなのか？ でもなんで保健室？」

「だって、何か困ったことがあったら保健室に行けって、お兄ちゃん」

なんて迷惑な兄貴だ。

「住所とか分かる？」

「はい」

女の子はウサギのぬいぐるみの首についているチャックを外すと、中からピンク色の携帯を取り出した。

なんかグロいな……

そんなことを考えていると、携帯を操作した女の子が、こちらに画面を向けてきた。

「見づらいな……」

遠目から何とか携帯の画面を覗き、住所を確認すると、近所まで
は行かないが、それなりにうちに近い住所だった。

「そこならわかるから、紙に書いてあげるよ」

「本当ですか？」

「ああ、じゃあ紙とペン貸してくれる」

「はい！」

彼女は元気よく返事をする、ぬいぐるみを抱えてトコトコと近づいてきた。小動物みたいで実に可愛い。

ちょうど隣まで近寄ってくると、またウサギの首から手を突っ込んで、何かのプリントの裏と、シャーペンを一本取りだし、お腹におかれた。

「えっと、書けないからこのベルト外してもらっていいかな？」

「や」

見事な即答

「じゃあ書けない」

「え〜！ それは困ります！ なんとかしてくださいー！」

「なんとかするのはそっちだよ！ このベルト取ってくれば何でもしてあげるから！」

「それはやです！」

「なぜそこまで!？」

「だって外したら、変態さんに襲われてしまいます……」

そう言って軽蔑の眼差しを向けながら少し距離を取られた。

なんかショックだ……

「襲わないし！ 変態じゃないし！」

「そこまで言うならチャンスを上上げるです！」

「チャンス？」

「はい、私が出す質問の答え次第で変態さんじゃないかどうか見極めます！」

「おう！ 望むところよ！」

あれ？ 俺道教えるのに立場逆じゃね？

「じゃあいきます！」

この状況に違和感を覚えた将だったが、女の子はそんなことをま

るで気にせず、叫んだ。

「猫か犬、あなたはどちらが好きですか？」

「……え？」

「え？ じゃないです！ どちらが好きかを聞いているんですよ？」

「いや、そういうことじゃなくて」

なぜ変態から犬や猫に派生した？

すると彼女は、ハツと何かに気付いたような素振りを見せると、ぬいぐるみで少し顔を隠しながら、申し訳なさそうに言った。

「あ、もしかして猫と犬知りませんでしたか？」

「そんなわけあるか！」

「ひうつ！ じゃ、じゃあ早く答えてくださいよ」

「だからうつてああもう！」

うつつ、とまた泣きそうになっている彼女に付き合ってるのが、だんだんバカバカしく思い、ほぼヤケクソ気味に答えた。

「犬だよ犬！ 小型犬！」

「犬……」

「ほら答えたぞ……っておい、どうした？」

気付くと彼女は自分の横に立ち、ぬいぐるみの首からまた何かを取りだした。

カッターだ。

彼女はぬいぐるみを地面に落とすと、両手でカチカチつと刃を数センチ出し、今だに「犬……」と呟き、飛び出た鋭い刃を見つめている。

やばい、嫌な予感しかしない。

「おい、落ち着け、落ち着いてそれを捨てないさい。な？」

説得を試みるが、彼女は首を左右に振って、拒否の反応を示した。その目には既に先程の涙は残っていない。あるのは何かを決意した力強い瞳。

「大丈夫……です」

「何が!？」

「すぐに済みますから」

「済ます!？」

「やっぱりこの子、殺る気だ!」

彼女はカッターを逆さに持ち替え、両手を目いっぱい高くあげる。死にたくないという本能が働き、なんとか抜けだそうとするが、無慈悲にもベルトは将を強く結び付けて離れない。

誰か助け

「えいつ！」

グサツ！

求めた助けは誰にも届かず、可愛い掛け声と共に、刃はまっすぐに将の胸へと吸い込まれていった。

桐ヶ谷 将17歳、こうして彼の人生は幕を閉じたのだった。

D E A D E N D

震・ヤンでれ…DEAD…（後書き）

最近ヤンデレの漫画を探していたら、友達に

「未来日記は俺の中で最高のヤンデレ漫画だ」

とか言っていたので、昨日試しに1巻買ったら……めっちゃおもしろえ！という感じで深夜1時に全巻買いに行ってしまった作者です。

みなさんも機会があればぜひ一度読んでみてください

あ、こちらもよろしくお願いしますね。

震・ヤンでれ…地図…

「これだけ買えば平気ね」

「そう？ わたしはもう少し買った方がいいと思うんだけど」

静香と凜は現在、学校から20分程離れた大きな薬局に訪れていた。既に到着してから20分は経過しており、籠の中にはこれでもかというくらい薬がたくさん入っている。しかも2籠。

「これ以上は必要ありません。お兄様が今この瞬間も苦しんでいるんです、急ぎましょう」

「それもそうね」

二人は頷くと、急いで会計を済まし、薬を買い物袋に詰めて店を出た。ちなみに金額は7万ちよい掛かった。

そんなことまったく気にせず、静香と凜は両手いっぱい買い物袋を持って学校への道を走っていた。

待っていてください！ お兄様！ 今行きます。

前を走っている自転車を抜き去りながら走っていると、突然凜が質問してきた。

「ねえK」

「なんですかG」

「あなた、何で将君のこと好きになったの？」

「突然なんですか？」

「いや、少し気になっただけ、まさか一目惚れなんてことはないでしょう？」

凜はそう言っつて静香の方を少し覗く。

私が、お兄様を好きになった理由……確かに凜の言つとおり、一目惚れなんかではない。だが、お兄様を狙っている奴に、のこのこ教える気もない。

答えを返さずに数分が経ち、二人の間に長い沈黙が流れる。走っている足音でさえ、無音に感じてしまう感覚だ。

その無音を打ち砕くように、静香は小さな声で言った

「……ただ、お兄様が初めて私を人間として、見てくれたからです」

「……そう」

教えてしまった。

なぜわざわざ敵である凜に教えてしまったのかは分からない。このまま黙っていても、おそらく凜は無理に聞いたりはしなかっただろう、それなのにわざわざ口にしてしまった。

なぜ？

自分が凜の過去を知っているからだろうか？ それともただの気まぐれ？

いや……違う。

もしかしたら、私は凜のことを……ライバルだと認めているからかもしれない。

ちょうどその時だった、顔に当たる少し冷たい風の中にある匂いを見つけたのは、

「どうかしたの？」

少しスピードが落ちた静香に気付いた凜が、声をかけてくる。

「いえ、何でもありません、急ぎましょう」

きつと気のせいだ、お兄様があの状況から抜け出すのは考えにくい、たとえ第3者の介入があつたとしても、こっちはお兄様帰宅コースではない。

ともあれ急いで帰ることに越したことはない。

二人は先程以上の速さで走りだしたのだった。

「お〜い、何やってんだ、置いてくぞ」

将は後方にある道の途中でしゃがみ込んでいる女の子を呼び掛け

る。彼女を家に送ろうと保健室から出発して20分程たっただろうか？ とつくについでいるはずなのに、今だ到着しないのは間違いなく彼女のせいだと言えるだろう。

はあ、と溜息をついて、ゆっくりと彼女に駆け寄る。彼女は何かをじゅっと見つめ続けている。

「んで、今度は何を見つけたんだ？」

「これ！ これ！」

まるで新しいおもちゃを見つけたように目をキラキラさせながら、堀にくつついている生き物を指さした。

「ああ、トカゲの子供か」

昔良く友達川に取りにいったっけ、おかげであそこらへんのトカゲを一掃してしまったけど

「これ、子供なの？」

「ああ、尻尾が青くて綺麗だろ？ これはトカゲの子供の頃の色だな、大人になると体の色が、変わるんだよ」

今壁にくつついているのは、黒くて光沢があり、尾は青く美しい色をしている。尻尾を切ったことがないためか、より美しく見える。

「大人になると変わっちゃうの？」

「ああ、オスは全体的に黒、メスは茶色になって、光沢が失われる

な。だからトカゲって言うとみんな結構こつちを想像するんだよな」

「へ〜、そうなんだ〜」

彼女は納得したように言うと、再び視線をトカゲへと移した。

「ってそうじゃなくて、さっさと行くぞ、遅くなると俺の帰りまで遅くなるんだから」

もう何回もこんな状態が続いている、昆虫や動物を見つけたんびに駆け寄って行っていく、まるで小学生の男の子みたいだ。

「はい」

元気よく返事をする、ぬいぐるみを抱え直し、将を置いて先へ先へと走って行く。

なんか、お父さんになった気分だなあ、なんて思ってみたりもする。この年で言うのもなんだが、

とまあDEADENDになったと思われた将であったが、この通り今だぴんぴんしている。

〈20分前〉

「えいつ」

ドスッ

まじかよっ！

今日初めて会った女の子に突然カッターで腹を刺され、将は激痛に眉を潜めようとしたが……

「あれ？」

痛くなかった。

どういふことかと首を上げ、腹を見ると、カッターはベルトのうち的一本に見事突き刺さっていた。

「んしょ、んしょ」

彼女は刺さったカッターをぐいぐい動かし、ぶちつと完全に切り裂く。おかげで腕が動くようになった。それを見た彼女は、むっふーと得意げな顔をした。

「どっつ？上手いでしょ！ カッター刺し！」

すごい？ すごい？ と聞いてくる彼女をとりあえずシカト、片腕で、残りのベルトをカチカチと外していく。

ようやく最後のベルトを外し終わると、上半身を上げ、伸びを一回する。そして助けてくれた張本人に向き直る。

「とりあえず、頭出しな」

「え？ 何？ 何？」

疑問に思いながらも、素直に頭を差し出してくるところを見ると、

悪い子ではなさそうだ。とりあえずその頭に赤く燃え盛った右手をプレゼントしておく。

ゴソツ！ という音と共にクリーンヒットした彼女はキュツ！ とかいう良く分からない悲鳴を上げて、その場にしゃがみこんだ。

「とりあえず言いたいことがある、殺す気か？」

まじで人生終わるかと思ったぞああ？

「うっ、ひどいです……」

「ひどいのはそっちだ、寿命が3年は縮んだぞ！」

彼女は頭を擦りながら涙目で、将を見上げた。

「助けたんですよ？ 私良いことしたんですよ？ 天使ですよ？」

「どこがだ！ これ見るこれ！」

自分の制服の中心を指さす。そこにはカッターが貫通して服が切られたあとが残っていた。服を2枚も貫通しているのを見ると、相当の力が入っていたことがわかる。

というか腹を刺された時の衝撃で少しリバーズしそうになったぞ。

「？ 破れてますね」

「違ったる！ お前のカッターだよ！ カッター！」

「ああ……?」

本当に分かっていないのか、彼女の頭に?マークが出ているのが見える気がした。

「もういいや」

一応助かったっていえば、それもまた事実、仕方ないと言わんばかりに、将は紙にペンを走らせ始める。

「? 何をしてるですか?」

「あのな、お前に地図を書いてやるって話だったろうが」

「ああ!」

そういえば! といった感じの彼女を見て、大丈夫かこいつ、と思いつつも地図を渡す。

「とりあえず、そこまで行けばさすがに分かるだろ、俺も完璧に知ってるわけじゃないしな」

彼女は将の話の話を聞いているのかいないのか、渡された地図をガント見していた。

とりあえず静香達が戻ってくる前に退散しとくか、また面倒なことになりそうだし。

ベッドの脇に置いてあった鞆を手にとって、外した無数のベルトを回収し、保健室を後にしようと、

「……なんだ？」

したが、制服を掴まれてしまった。

「わかりません」

何が、と聞こうとしたが、彼女が差し出してきた地図を見て納得した。

「分からないって……つまり送れって言うてるのか？」

「……やっぱり、迷惑ですか？」

彼女はそう言うと、掴んでいた制服を離し、顔を暗くして黙り込んでしまった。

正直迷惑か迷惑じゃないか言われるとすごく迷惑だ。これ以上厄介事が起こる前に家に帰りたと思う。

将は枯れた花のような彼女を置いて、保健室の扉をあける。

とても面倒だ、が、

「ほれ、さっさと行くぞ」

「あ」

このまま行くわけにも行かんわな。

諦めの溜息をついて、扉を開けて待っていると、再び元気を取り戻した花が、明るく返事をした。

「うん！」

震・ヤンでれ…脅迫…

「ねえ、まだ着かないの？」

「もう少しだから我慢しろ、ってかいうかまだ5分くらいしか歩いてないぞ」

「どんだけ体力ないんだこの女」

トカゲやらカマキリなどに気を取られて、時間が経っているように見えるが、実際に進んだ時間はまだ5分程度。

にも関わらず、当の本人は、やけに大きなウサギのぬいぐるみを抱いて、道の隅に座り込んでいた。

「疲れた、もう歩けない」

「俺だつて帰りたんだよ！！」

思わず殴りたい衝動に駆られたが、なんとか抑え忍んで笑顔を向け、熱い拳をポケットに納める。危ない危ない

「ほら、我が儘言っていないでさっさと立て」

「む、私にこんな重労働させるとは…あ、いいこと思いつきました！」

絶対にいいことじゃない。

言うやいなや、バツとその場から跳ね上がり、一人満足気に頷く彼女を見て、将はこの上なく不安な表情を作った。

今までの流れから、彼女の提案がまったく嫌な予感しかしないのは言うまでもないだろう。

そんな嫌な予感の塊である彼女は、いそいそとこちらに駆け寄ると、両手を広げて笑顔で一言、はい

「と、いうわけで、おんぶしてください」

「いやいや自然に言っても嫌だから、しないから」

「え〜」といいながら一瞬うなだれた彼女だったが、何かに気付いたようにハツと顔をあげると、みるみるうちに顔を赤くした。

そして身を守るように腕で自分の体を抱きながら、彼女は恥ずかしそうに言った。

「……さすがに抱っこは嫌ですよ？」

「いや、お前どんだけ自分の都合のいいように事運んでるんだよ！俺だって嫌だわ」

「なんだ、じゃあやっぱりおんぶじゃないですか」

「いやいや違つてしょー」

「あ、まさか抱えるのですか!? 脇に抱えるのですか!?」

「抱えねえよ! 抱っこしねえよ! おんぶしねえよ!」

むく、と頬を膨らませながら尚諦めずに、おんぶをねだる少女と、それを断固拒否する男子高校生。

まるで仲の良い兄妹に見えるかも知れないが、決してそんなことはない。ただの醜い争いである。

だがいつまでも続くと思われたそんな醜い戦いも、彼女の何気ない一言”によって、あっけなく終止符が打たれることとなった。

「あんまり嫌々言つと、さっきの保健室のこと学校中に流しますよ!」

.....

.....

.....

「これでいいのか?」

「おお、楽ちゃん」

結局脅しに敗れ去った将は、羞恥と怒りを抑えながらも、おんぶを実行に移した。

けど仕方ない、もし断って本当にばらされたら、学校中の生徒か

ら、「よ、変態」というさわやかな挨拶をされるかもしれないのだ。そうしたらもう学校には二度といけなくなってしまう。

「これである件は終わりだからな！」

「わかってますよ、あ、川にコイが居ますよ！」

ほら！　と言いながら橋の下に流れるコイを指さしながら、頭の上でキャツキャ騒ぐ少女。

ああ、このままコイツ落として帰っていいかな？

そんなことをちよっぴり考えながら、彼女の帰宅路を歩む、将なのだった。

一方その頃学校では、ちょうど静香達が到着したところだった。

「これは……」

保健室に入って目にしたのは、もぬけの殻となった保健室だった。ベッドに寝ていたお兄様の姿も消えている。

部屋の様子を見た凜が、すぐに隣の静香に口を開いた。

「……………どう思うっ？」

「そうですね、まず第三者の仕業で間違いないでしょう、まずあの状態からお兄様が自力で抜け出すことは不可能です」

「そうね、ベルトが綺麗に回収されてるところを見ると、無理やり連れて行かれたっていう感じでもなさそうね」

「机の椅子の位置や、薬品の位置が変わっていないところをみると、先生がやったわけでもなさそうです」

「そして今はまだ2、3年は授業中、となれば、考えられるのは1年が保健室に来て、将君を解放したってところかしら」

冷静に分析しながら、考えられる可能性を上げていく。

静香は、兄が寝ていたベッドのぬくもりを確かめるように、布団や枕に手をつける。

「……まだ少し暖かいです、どうやら既に22分程経過しているようです」

「そう、っていうことはもう家に帰ったのかしら」

「それはないと思います」

「なんでよ」

手がかりを探すために薬品などを見ていた凜が、そこで静香に向き直す。

「さっき帰ってる途中、お兄様の匂いを感じました、気のせいかと

思いましたが、気のせいじゃなかったようです」

「さつき？ でもあつちは将君と帰り道が違うよね？」

「はい、理由はわかりませんが……それとも一つ」

やっぱりこれは……

その“何か”に気がついた静香は、急激に襲い掛かって来る、怒りの感情を感じ取った。

“……せ……！”

頭の中で、自分自身が何かを訴えてくる感覚が襲いかかる。

「っツ！」

怒りに感情を支配されぬよう、八つ当たりのように一発枕を殴り付ける、拳は枕を突き破り、ベッドの板まで貫通していた、少し拳に痺れが走るが、おかげで何とか心を落ち着かせることに成功したようだ。

凜はそんな静香に疑問を抱いたが、すぐに興味をなくし。机に置いてあつた薬などを手に取って見初めていた。

今だ頭に残る怒りの感情を抑え込みながら、なるべくいつもどおりの口調で、冷静に、かつ淡々に、静香は先程の続きをゆっくりと告げた。

「……この部屋に、私達以外の、雌の匂いが充満しています」

次の瞬間、保健室に鳴り響いた音は、人の声ではなく、凜が手で握り潰した、ビンの碎け散る音だった。

震・ヤンでれ…脅迫…（後書き）

久々の更新です。

ここでユーザーの人をお願いします。

実は今短編を執筆しているのですが、このサイトに投稿するわけにはいかないものなのです、ですが誰かに読んでほしいので、誰か読んで感想をくれる人を探しています。（まだ製作中ですが）

もしも読んでくださる人がおりましたら、メッセージか、感想に書き込んでください、お願いします（ちなみに内容は恋愛）。

もちろんこの小説の感想、アドバイスもあればよろしくお願い致します！

震・ヤンでれ…ヤクザ…

誰か、助けてください。

突然何を言ってるんだと思われるのも重々承知で、章は叫びたい衝動にかられていた。

汗を流しながら正面を見る将と、その将の背中でおもしろいものを見るように同じく正面を見る彼女、頭の上にウサギの人形を乗せられ、緊張感がまったく伝わってこない。

そんな二人の視線の先にあるのは、真っ黒な車。まるで将たちを通さないように横向きに止まっている。

さらに後ろにも同じ黒い車が来て、取り囲むように止まる。

この車何がすごいって、横になげえ！ 将は車に詳しいわけではないので車種まではわからないが、威圧感ハンパない。

そしてそんな車から出てきたのは、

「おい、その子を返してもらおうか？ ああ？」

リアルヤクザきたー！！！！

頭が人間じゃない赤色していて、顔にはやけどのような後、さらに3つつものピアスを左耳につけている。そんなにつけて痛くないのかな、とか思ったが、どう考えてもそんなことを聞いていい状況ではなかったのでやめておく。

そんなことよりも、このヤクザが言うその子というのは、まちが
いなく背中に乗っている少女のことを言っているのだろっ。

「きいてんのか？ てめえ」

「は、はい」

「ならさっさと渡せ」

はい！ どうぞ持っていっちゃってください！

って言うてすぐにも渡したいけど、さすがにそんなことはでき
ない。

だってどう考えても渡したらこの子の人生終わっちゃいそうだし。

背中に乗せているため、表情は確認できないが、きっと怯えてる
に違いない。

「おい、聞いてんのか？ 早くしねえと散らすぞ？」

何を—————！？

どうしよう、どうすればいい？ このままだと間違いなく二人と
も散らされてしまう、何かはわからないけど何かを散らされまっ！

冷静にどうすればいいのか考えようとするが、テンパりすぎてう
まく頭が回らない。

せめてこの子だけは、とかっこいいことを考えるも、そう都合よ

くそんな案は閃いてこない。

ここまででは、汗を頬から流し、将がそう思ったそのとき――

「もう、豆男さん、そんな怖い顔しちゃだめですよ、めっ！」

「あ、へい！ すいやせんお嬢！」

背中から、可愛い声が聞こえた。

しかも、さっきまで殺す勢いのガンを飛ばしてきていたヤクザが、将に向かって深々と頭を下げてきた。

いや違う、正確には、将の背中に乗っている彼女に頭を下げている。どういうことだ？

とりあえず話が見えない将は、背中に乗っている彼女に問うてみる。

「な、なあ、このお方は、お前の知り合いなのか？」

「ああん！！ てめえ！ お嬢にお前呼ばわりとは、殺されてえのか！！」

「いえ！！ 滅相もございません！！！」

すごい形相で迫ってくるヤクザの顔に、反射的に敬礼のポーズを取る将。

だが、そんなヤクザさんの頭に小さなゲンコツが落ちた。

「もう！ 豆男さん！ ダメだっていったでしょ！」

「は！ 申し訳ございません！ お嬢！」

さささつと後ろに下がって再び後ろに下がるヤクザさん、未だに話はよく掴めていないが、二人のやり取りを見る限り、ヤクザさんの名前は豆男というまったく似合わない名前をしており、背中の彼女に頭が上がらないらしい。

すると突然、頭をポンポンと叩かれ、「もう降ろしてくれていいよ」と言われた、将は黙って腰を曲げると、背中に乗っていた軽い重量感がなくなったことに、少しほっとする。

一方背中から降りた彼女は、まっすぐ豆男さんの元へと駆け寄って行く。

「ただいま、豆男」

あんな怖い人を呼び捨てにするとは、コイツ実はかなり肝座ってるのか？

そんな彼女を豆男さんが、が温かく迎え入れる。

「お帰りなさいやせ！ お嬢！」

豆男さん？ は美しい姿勢頭を下げると、そのまま将の方へと視線を飛ばした。

「ところでお嬢？ この殿方とは一体どういうご関係で？」

口調自体はとても優しいのだが、目には確実に殺意が籠っている。

もしも保健室での一件がバレたら、このまま東京湾に沈されるくらいにやばい目をしている。

けど大丈夫！ さっきのおんぶで、その件については他言無用な
は

「保健室で秘密を共有する仲だよ！」

即刻バラされた !!!!!

「ほ、保健室！？ お、お嬢！　そこで一体何が！？」

豆男さんは驚愕の顔で彼女へと詰め寄る。

対する彼女はこちらに振り向き、目でなんらかの合図を送って来た。

なにを伝えたいのかはさっぱりわからないが、とりあえず命だけは助けてもらえるように視線で返す。

すると、彼女は豆男さんの方に向き直って、恥ずかしそうにぬいぐるみで顔を隠しながら、ぼそりと言った。

「……………あの、二人だけの……………秘密だから……………」

終わったーーーーー！！　っていつか何！　そのいかにも何かありました宣言！

こうなったら本当のことを話してでも生き延びるしかない！　そ

う思った将だったが、どうやら時既に遅しかったようだ。

死刑宣告を進言した彼女の言葉を聞いて、豆男さんは真つ先に手を叩いた。

パン！　つという音が鳴り響いたと思ったら、次の瞬間、車から降りてきたムキムキマツチヨのお兄さん達に囲まれてしまっていた。

そして豆男さんがリーダーのように一歩近づいてくる。

「何か、言うことはあるか？　小僧」

「ちょ、ちょっと待ってください！　誤解です！　俺達何にもしてません！」

「ほお、じゃあ保健室でふたりっきりの秘密って何なんだ？　ああ？」

「そ、それは、ええと、なんて言えばいいのか良く分からないんですけど、とにかく！　あなた方が考えてるようなことはしていません！！」

「信じられるか！　お嬢見てえな美少女と二人っきりで、ムラツとこない奴なんているか！」

そ、その発言はどうなんだ？　と思うが、怒り心頭の豆男さんには、おそらく何を言っても信じてもらえなさそうだ。

な、なんとか良い誤魔化しを思いつかないと、そうだ！

周りのヤクザの方達と目を合わせないように、将は今思いついた名案を答える。

これで、どうだ!!

「俺、ロリコンじゃないですから!!」

「てめえ!! お嬢に魅力がないって言いてえのか!!」

「いいえ! 魅力いっぱいです!!」

だめでした……

「ほお…… やっぱり…… 覚悟はできてるんだろうな。小僧」

とうかますます怒らせてしまったようで、豆男さん&ヤクザの人達が、指をポキポキならしながら、すごい顔で迫ってくる。

何か逃れるすべはないかと模索するが、何も思い付かない将。

このままでは…… そうだ彼女は!?

最後の希望を胸に、将は豆男さんの横から彼女の様子を窺う。

「えへへ……」

結果・ぬいぐるみに顔を埋めて照れていた。

その瞬間将は悟った、自分の終わりを

いつの間にか豆男さんの手が、除々に首元に近づいてきて、掴まれたと思った次の瞬間。

ドオオオオオオオオン！！ という爆発音が、将の後ろから鳴りひびいた。

保健室をさんざん荒らした静香達は現在、将が他の女と学校を出た事を知り、将を追いかけ、再び外を走りまわっていた。

「それでG、あなた本当にお兄様の居場所はわかるんでしょうね」

さすがの静香でも、外でお兄様の匂を辿って探すには、少しばかり時間を食ってしまう。そこで今回は、Gがお兄様を探す役目となった。なんでもなにか策があるらしい。

「ふん、私はKみたいな野生的なやり方ではなく、確実なデジタル的なやり方だから、心配無用」

そういつてGは鞆の外ポケットから音楽プレイヤーを取り出した。

「何をしているの？」

「黙って見てなさい」

イラストきたが、今は仕方ない、お兄様を見つけるためだ我慢する。

拳を強く握り閉めて怒りを抑え、改めてGの取り出した音楽プレイヤーに目をやると、彼女はピピッと機械を操作した途端、突然音楽プレイヤーにアンテナのようなものがつきだした。

「まさか、発信機？」

「人間の発明品は有効活用しないとね」

Gは見せびらかすように機械見せつけてくる。

こいつ、いつの間にお兄様に発信機を、でもお兄様の身の回りの毎日チェックしているし、一体どこに

と考えだした瞬間、すぐに答えは導かれた。

毎日欠かさずお兄様の物をチェックしている私の目をすり抜けてお兄様に発信機を取り付ける方法など、考えてみれば一つしか存在しない。

それはずばり、食事だ。

おそらく食べ物の中に小型発信機でも詰めておいたのだろう。この方法なら、静香に見つからず、将に発信機を取り付けることが可能。

Gのことだ、お兄様に危害がない発信機を飲ませたんだろうが、油断も隙もあったものではない。

「どのくらい離れている？」

「そこまででもないよ、今の速度なら、あと2分くらいで到着する」
だが今回はその発信機のおかげでこうして追うことができるのだ。
今回ばかりは大目に見て上げよう。

そうこう考えてるうちに静香の嗅覚も機能し、お兄様の匂いを察知した。だがそこで、静香は一つ違和感を感じた。

お兄様と雌一匹以外に、複数の下種男の匂いを感じとったのだ、

そこで、少し前を先行していたGが発信機をポケットにしまって、言葉だけこちらに投げかけてきた

「その角を曲がった道の先にいるわ」

「そのようね」

静香は匂いを気にしながら、Gに続いて曲がり角を曲がった。

そこで二人が目にしたものは……

「あれは……！」

「将君!？」

複数の黒服の男どもに囲まれている将の姿だった。

黒のベンツが横向きに置かれているため確認にしばらく、間違いない、お兄様だ。あの黒服の傍に

いる雌が気になるが、今はお兄様を助けるのが先決。

「G！」

「わかってる！」

おそらくGも同じことを考えていたのだろう、左右に分かれて速度を上昇した私達は、互いに視線を一瞬合わせる。

それを合図に少し右前を走っていたGがベントツの前に飛び乗って、エンジン部分にパンチを叩きこみ、すぐに離脱。

ドオオオオオオン！ と少し派手な爆発を起こして燃え始めるベントツ、それに気付いた全員がこちらへと視線を向けた。

「な、なんだお前達！」

今の最優先事項は、お兄様の救出、こいつらの排除は後回しだ。

静香と凜は、掴み掛かってきたヤクザの顔を踏み台にして将のところまで飛ぶと、二人で将の両腕を掴んで一気に後退し、距離を取る。

「大丈夫ですか！？ お兄様！！」

「将君平気！？」

「あ、ああ、うん、大丈夫」

どうやら手を出される前に救出できたみたいだ、良かった。

ぺたぺたと将の体を触り怪我がないことを確認して、二人はほつと胸を撫で下ろし、ゆっくりとヤクザたちへと視線を向ける。

残りの数は11人、こちらを半円の形で取り囲んでいる。それに對してこちらは二人、普通に考えて状況は最悪の展開のだが、

「G、あなたは左」

「それじゃあKは右」

二人の目には、殺意と怒りの色がしつかりと現れていた。

震・ヤンでれ…ヤクザ…（後書き）

ずいぶん久しぶりの投稿です、これからもよろしくおねがいしま
す

震・ヤンでれ…罰?…

現在将は、自宅の自室で正座をさせられていた。

理由はもちろん

「さあ、お兄様説明してもらいましょうか?」

「あの子とはどういづご関係なの? 将君」

尋問です。

結局あのとどうなったかと言うと、炎上したベントツが原因で、すぐに市民の味方であるパトカーが参上してしまったので、将達は面倒になる前に逃げてきたのだ。

いやああの時の静香達は、マジでやばかった(相手が)ので、正直助かったと思ってる(法的に)。

そして仲良く三人でうちに来て、玄関でロープで縛られ、部屋に連れて行かれ、こうして二人に

「速く吐いた方が身のためですよ? 将さん?」

ではなく、三人に尋問をされているという状況だ。

「ってちょっと待って! なんで千鶴さんまで自然にそっち側にいるの!?!?」

しかも今日の出来事知ってるみたいだし！

そんな将に対し、静香が腕を組んで目を細めた。

「お兄様？ 今はそんなことを聞いているのではないですよ？」

「そうだよ、ちゃっちゃとあの雌豚、いえミジンコ、いえ生ごみとの関係を教えて」

「言い直してどんどんひどくなってるよ！？」

というかついに生き物ですらなくなってるよ。

アイドルの時に凜に何かあったのだろうか？ 昔はこんなことを言う子じゃなかったはずなのに、

幼馴染と義妹の言動の悪さを考えながらも、これ以上長引くとまずいと察した将は、大人しく保健室であったことを説明した。

「 というわけで、彼女には保健室で縛りあげられていたのを助けてもらっただけなんだよ」

「 ……ではあの黒服の男達は一体なんなんだったんですか？」

「それは俺もちょっとわからないんだよ。でもずいぶん懐いていたみたいだし、向こうもお嬢って呼んでたくらいだから、身内ではあると思うんだけど」

そう、静香の言うとおり、結局あの黒服の男達がなんだったのかはわかっていない。

そんな尋問の中、一人大人しく話を聞いていた千鶴さんが手を挙げた。

「あの、その人達はベンツに乗ってたんですね？」

「はい、そうですけど」

「お母様、何か知ってるの？」

「はい、たぶんその方達は、大石財閥の人達ですね」

「大石財閥!？」

それって誰もが知ってる、あの超金持ちのことか!？

将が目を見開いて驚く。

無理もない、大石財閥といったら、テレビに出る程有名な金持ちだ。

「ああ、そういえばこちら辺に住んでるってお母様言っていましたね」

「マジですか!？ 千鶴さん!」

「ええ、あら？ 将さんは知らなかったの？」

千鶴さんが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「いやあ、バカでかい家があるとは聞いていたんですが、実際見た

ことなくて」

確かに一時期学校で噂になっていたこともあったけど、そのうちようどゲーセンにレッドファイトが稼働していたため、それどころではなかったのだ。

「ということは、あの生ゴミは大石財閥の子ってことね」

「あの黒服共の呼び方から察するにそうなりますね」

あれ？ まてよ？ ということは

「もしかして俺達って危ない？」

だって俺は色々と誤解されちゃってるみたいだし、静香達もベントを破壊したりしてるし……

そんな将の問いに、静香と凜が当然のように答える。

「もしかしなくても狙われますね」

「間違いないね」

「それって色々とやばくないか？」

「大丈夫ですよ。お兄様は私が守りますから」

「大丈夫、将君は私が守るから」

それは男としてどうかと思うところがあるが、この二人に守られ

たら確かに平気な気がする。

だがこちらは平気でも、相手側の被害が甚大ではないものになりそうだ。

将がそんなことを考えていると、千鶴さんが手を挙げた。

「そのことに関しては私がなんとかしておきますから安心してください、将さん、あ、ついでに静香達も」

「ついで、ですか」「ついで、ねえ」

まるでおまけのような言い方に、二人の視線が千鶴さんを捕える、が、さすがというべきか、そんなことをまったく気にせず、千鶴さんはにこにここと笑顔を向けてくる。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、気にしないでください、未来の旦那様の頼みですもの」

「っ!?!」

突然なに言い出すんだこの人！

千鶴さんのさりげない一言に将が思わずふきだした。

しかも、言った本人が恥ずかしいのか、顔に手を当てながら頬を赤く染めていた。

そんな仕草に、将も釣られて顔を真っ赤にする。

「じっほん！ ではその件に関しては、お母様に任せるとしまし
う」

「おほん！ それで構わないよ」

二人がわざとらしい大きな咳をしながら、千鶴さんの案に賛成し
た。

「そ、そうだな」と将も賛成に一票を入れる。

けどどうやってなんとかするんだろう？ と疑問が沸くが、気に
しないでおこつ。きつと大石財閥に何かしらの繋がりがあるのだろ
う。

まあ何はともあれ、俺の無実を証明した。これでようやく誤解が

「さてと、それじゃあどうしましょうか」

「そうだね」

解け

「お兄様の罰」

てな――い――！

久々に見た静香と凜の嫌な意気投合に、将は冷静に、

「あの二人共？ 誤解だつてわかつてもらつたんじゃない……」

「はい、お兄様の言っていることは全て理解しました」

「でも、将君があの子と一緒にいたのは事実」

「よつて罰は逃れられません」

訂正、誤解は解けても、あの子と一緒に居たために、俺は罰を受けなければならぬらしい。

ふざけるな！ そんなんじゃないか！

すぐにでも抗議すべきことだが、残念ながらおそらく俺が何を言つても罰は逃れられないだろう。

ここはやはり……

将はちらりと千鶴さんの方に視線を向ける。

きつと千鶴さんなら、この絶望的状况を打破できるはずだ。ここはお力を借りる他ない！

そう考えた将は視線で千鶴さんへと助けを求める。そしてそれに気付いた千鶴さんは、笑顔で返して、

「どんな罰がいいかしらね、ふふ」

悪魔の発言を漏らしていた。

終わった……もう駄目だ……

将は、ははっと乾いた笑みを浮かべる。

唯一の希望は、絶望へと変貌してしまった。これではもう助かる道はない。

手足を縛られた状態では、彼女達から逃げられるわけもない。将はただただ、目の前でどんな罰を与えるかもめている三人を、見ていることしかできないのだった。

あれからどれくらい経ったか分からないほど時間が過ぎた。

「お兄様、起きてください」

「ん、あれ、俺寝てた？」

「はい、それはもうぐっすり」と

どうやら絶望のあまり眠ってしまっていたらしい。外はもう夕方の色の空に変わっていた。

「それで将君、罰のことなんだけど」

「これを」

そう言って千鶴さんが3枚の紙を降り畳んで地面に並べる。

「これは？」

「三人がそれぞれ用意した罰です、今回はお兄様が選んだ一枚を罰にさせてもつらという形になりました」

つまり三人の意見がまとまらないから、それぞれを準備したつてことか。まあ三人の意見がまとまるとは考えてはいなかったけど。

将は納得しながら、目の前の床に並べられた3枚の紙を見る。その時将は、自分の体を縛っていた縄が外されていることに気がついた。

とは言っても、逃げられる気がしないので、特に現状は変わらないんだけどね。

さてそうになると、この三枚から一枚を取りださなければならぬ。嫌な予感しかしないが、考えていても仕方がないのでさっさと一枚を取って、書かれていることを確認する。

「えーと何々、今日から私のことを千鶴と呼び捨てにすること」

ってあれ？ こんな簡単なことでもいいの？

もっとすごい罰が待っているのかと覚悟していた将は、正直拍子抜けした。

「あの、これ千鶴さんのですよね？」

「ええ、そうよ」

「えっと、こんな命令でいいんですか？」

「あら？ もっとすごい命令の方が良かったかしら？」

「いいえ、これで良いです」

まあ本人がこれでいいなら別にいいか。

「ではさっそく」

「あ、はい、千鶴？」

「はい」

将の言葉に、千鶴さんが満面の笑みで返してくる。少し恥ずかしくなった将は、赤くなった頬を軽くひっかくのだった。

「なんだか、やっぱり少し恥ずかしいな……」

「そう？ 私はうれしいですけど」

今までさんづけで呼んでいた人を呼び捨てにするって、簡単なことだろうと思っていたけど、意外とこっぴげずかしいものなんだな。そう考えながら、将は千鶴さんの笑顔をから顔を背けた。

すると顔を向けた先に、静香と凜が（将の）ベッドの上で頂垂れている姿が目に入った。

「うっっ、ひどいですお兄様……」

「裏切られた気分だよ……将君」

「お前らは何をいっとるんだ」

よっぽど俺に罰を与えなかったのだろうか、そういえばいつらの罰はなんだったんだ？

少し気になったので、前に置かれていた残り二枚を広げて、

婚約

結婚

ぐしゃっと握り潰してゴミ箱に投げ捨てる。

本当に千鶴さんをひいてよかったと、心から実感した将であった。

震・ヤンでね…罰?…(後書き)

やっぱり感想とかもらうと書く気がおきますね！
読んでくださって
方々に感謝です。

特別編〜温泉へGO〜（前書き）

久々の更新です。こないだ温泉いったこともあって、今回は300人お気に入り突破記念で、書いたのですが……

特別編〜温泉へGO〜

現在将たち桐ヶ谷一家、宮代一家は、家族全員でお出かけ中、その先とは……………

「お兄様、温泉楽しみですね」

「……………ああ」

将は少し表情を濁らせて返事を返した。

現在将達一行は、山梨にある温泉、鐘の山苑に向かって車で移動中なのだ。

「なんですかお兄様、その間は？」

「いや、特に深い意味はないぞ」

ふくれっ面になった静香をたしなめるようにさらっと返す将。

正直将はこの温泉にくることにあまり乗り気ではなかったのだ、理由はもちろん、

「あゝ、お兄様と一緒に温泉に入れるなんて、夢のようです……………」

「あの、うつとりしてるとこ悪いけど、俺お前と混浴なんか絶対入らないからな？」

「え〜〜！」

「え〜〜、じゃない！」

将の返答が予想外だったのか、静香が心底驚いた表情を作る。その時、前で運転している静香の母、千鶴さんが話に割り込んできた。

「静香、あんまりふざけたことを言うもんじゃありませんよ」

「お母さん……」

さすがは千鶴さん、娘の不埒な言動に鋭く注意する。これが親の貫禄という奴だろうか。

さすがの静香も。母親に注意されてか。押し黙ってしまった。

「そんな年になって男性と混浴とは、ましてや義兄である将さんとなんて、許されるはずありません」

うんうん

千鶴さんの言葉に同意を示すように、将もうなずく。

「それに、将さんと混浴に入っている権利を持つのは、母親のかわりである私だけです」

「そうそう、ってそうじゃないですよ千鶴さん！」

「え〜〜」

「だからえ〜、じゃないですって!」

訂正、貫禄など微塵も感じられなかった。

というかさすが親子、行動が先ほどの静香と類似している。

ーはあ、だから来たくなかったんだよ……

もうわかりいただけただろうが、将が温泉に行きたくない理由は、静香達がいるからである。

だってどう考えても何らかのトラブルが発生するに違いないから、それでも将が温泉に行こうと思ったのは、

「お兄ちゃん、温泉楽しみだね!」

「そうだな、実」

実が行きたいと言い出したからだ。最近あんまり遊んでやれなかったし、弟の頼みとあれば兄としては断るわけにはいかないからな。

「一緒に露天風呂も入ろうね!」

「おお! もちろんだとも!」

車の中で元気にはしゃぎ回る実を見て、将は頭をなでなでしてあげる。

ああ、やっぱり実はいいな〜

実のかわいさについて惚けていると、車内の空気がピリピリとしていることに気づいた。

近くを見ると、静香がジト目でこちらを見、バックミラーから千鶴さんもジト目でこちらを見ていることがわかった。

「お兄様・・・？ 私達の時はずいぶんと反応が違くありませんか・・・？」

「違っつてお前、別に男同士なんだから問題ないだろ」

「男なら別にいいっていうんですか？」

「いや、だって温泉で男同士、女同士で入るところだろ」

将が冷静に正論を答えると、静香が身を乗り出した。

「それは今問題となっている男女差別発言ですよ！ お兄様！」

「いや！ 全然関係ないから！ 一般発言ですから！」

「これは言い逃れできませんね。将さん」

「ちよつと千鶴さん、それっぽく言うのをやめてくださいよ！ むしろ言い逃れしかできませんよ！」

「なら弟妹差別ですねこれは」

「勝手に変な差別作るな！」

「いいえ、弟妹母差別ですよ」

「だから千鶴さんも乗ってこないでください！」

こんな感じで、将達を乗せた車は温泉へと向かっていったのだっ
た。

「ここが鐘の山苑か……」

休憩を挟んで車で1時間半ほどで、将達は目的地の温泉へと到着
した。

車を旅館の正面へと止まると、仲居さんの人であろう和服を着た
女性が、複数人かけよってきた。

そして車から出た将達を確認すると、一人の仲居さん以外の人達
が、車から荷物を丁寧かつ迅速に運び出していた。

へえ、今は荷物を持ち運んでくれるものなのか、すごいな

将が仲居さんの働きぶりに関心すると、のこっていた仲居さんが
深くお辞儀をしてきた。

「よくぞいらつしゃいました。本日は旅館・鐘の山苑にお越しいた
だきまして誠にありがとうございます」

「い、いえ！ こちらこそ！」

「あ、ありがとうございます……」

あまり温泉に来た経験のない将と実は、慌てた様子でお辞儀しかえした。

まさか返事がくるとは思わなかったのだろう。仲居さんが一瞬驚いた表情を見せたあと、「いいえ」といつてすぐに優しくそうな表情を作って、旅館へと招き入れてくれた。

「……………でつか……………」

旅館に入った途端、将はおもわず子供みたいな感想を口に出していた。

しかし将が驚くのも仕方ない。なにせ入口のロビー、フロントだけでも、学校の体育館と同等を程の大きさはある。

もちろん広いだけではなく、装飾、設備も行き届いているのが良く分かる。

全体的に和をイメージした旅館なのだろう。フロントに置いてある像は、石製ではなく、全て木製で作られており、生け花なども飾られている。

さらに驚きなのは、旅館の中に川が流れているところだ。川のあるところには小さな橋が備えられており、旅館の中でも自然を強く強調している感じがする。

それに旅館に入つてすぐ正面に、音楽でもするのか、大きなステージまで備えられている。更には至るところにソファアはテーブルがいくつも設置させられており、正直圧倒されてしまった。

「じゃあ私はチェクイン済ましてくるから、将さん達は向こうにでも座つて待つてもらえる？」

「あ、は、はい」

千鶴さんはそれだけ言い残すと、仲居さんと共にフロントへと向かつていった。

「お兄様、あちらに腰掛けましょう」

「ああ、そうだな」

静香が穏やかな表情を作りながら、端にあるソファアを指さす、特に断る理由もない将も、頭を縦に振る。

二人でソファアへと腰掛けると、緊張していた心が放たれたように、ふうつと軽いため息を漏らしてしまった。

「ふうつ、緊張はほぐれましたか？ お兄様」

「ああ、なんとか……」

「そんなに緊張しなくてもよろしいんですよ？」

「まあ、それはそうなんだけどさ」

静香の言うとおり、泊まりに行く客が緊張する必要はないのだが、旅行自体数回しかいったことがなく、しかも自分の知っている温泉とは違う雰囲気、つい緊張してしまったのだ。

「ほら、お兄様、実君だつてあんなに元気ですよ？」

確かに、視線を少し外に向けると、フロント内を走りまわる実の姿目に移った。

所かまわずおいてある像などに触れたり、川を触つてみたりなど、その行動は子供っぽいところが目立つ。まあまだ子供なだけだね。

それにしても

遊びまわっている実、なんて可愛いんだろうか。これはもうあれだ、キーホルダーとかになったら大人気間違いなしの愛らしさを持っているといつても過言ではないと思う。

「お兄様」

「んあ？」

「顔がひどいことになってますよ」

「まじか」

将は言われて慌てて顔を両手で挟む。

どうやら実の可愛さにあてられて顔が緩んでしまったようだ、今

度から気をつけないと……

静香のジト目を避けていると、チェックインを済ませた千鶴さんがやってきた。

「とりあえずチェックインは済ませたから、これからみんなでここにいきましょう。」

そう言っただけ千鶴さんが手に持っていた紫色の和紙をテーブルに並べる。

「茶室、清流冠？」

「お茶？」

千鶴さんのもってきた紙には、達筆な字で茶室清流冠と大きく書かれていた。

「そ、せっかくだし、みんなでいっってみない？」

こんなもんまでもらえるのか。と思いつつ、将は賛成に一票を入れる。

「いいですよ。」

とうにかそもそも将と実は連れてきてもらっている身、賛成もなにも千鶴さん達の行きたいところには付き合っるのが道理だろう。

それに茶室なんて入ったことないし、正直少し興味もあるのだ。

すると静香もすぐに答えた。

「私もお兄様が行くのであれば異存ありません」

「じゃあ、決まりね。実くーん！ 移動するわよー！」

「はーいー！」

「ではお兄様、参りましょう」

「ああ」

こうして将達は茶室・清流冠へと足を向けたのだった。

特別編〜温泉へGO〜（後書き）

2日間を書こうと思ったが……なげえ!!
というわけで続きは……わかりません！ すいませぬ！

震・ヤンでれ…土曜の朝…

ピピピッピピピッ！

んっ……

昨日散々説教を食らった将は、飯を食べてからすぐに布団へと潜り込んで眠りに付いていた。

ピピピピピピピッ！…

あれ？ もう朝か？

昨日色々動き回ったせい、体が中々布団から出ようとしない。

今日は確か土曜日だったはず、となれば二度寝してもなんの問題もない、眠い頭でそう考えた将は、もう一度闇の中へと意識を飛ばそうとして

「……………」じー

「……………」じー

飛ばそうとして

「……………」じー

「……………」じー

変な視線を感じた。

パチッ

「……何してるんだ？ 二人共……」

目を開けると、自分と同じ高さにしやがんでる顔が二つ並んでいた。もちろんその二つは、

「お兄様の寝顔鑑賞」

「珍しく右と同意」

この妙な所だけシンクロする静香と凜だ。本当は仲がいいんじゃないか？ と思う程のシンクロ率をほこる二人だが、当人達に言ったら確実に面倒くさい事件が起きそうなので黙っておこう。

それによく見ると、二人は普段過ごす服装ではなく、外出用の服、お出かけ用の服を身に包んでいた。しかも目ざましが鳴ったということとは現在朝7時、学校もないのに二人で外出だろうか？ 本当に珍しい。

普通の男子ならこの二人のおしゃれを前にして平静でいられるわけはないだろうが、いつも一緒にいる上に、まだ少し眠気が残っている今の将には、効果は薄かったみたいだ。

「どこか二人で出掛けるのか？」

「何をいつてるんですかお兄様、3人で、ですよ」

「3人？」

「ほお、それはまた珍しい、俺の知るなかでも、静香が自分以外と出かけるなんて数えるほどだ。しかもそのほとんどが千鶴さんと、

学校の友達か何かか？」

「まあいいや、なら気をつけて行ってこいよ。俺はまだ眠いから今日は寝てるわ」

それだけ言って、将はおやすみと寝返りをうつ。

すると今度は凜がくすくすと笑いながら言った。

「もう、まだ寝ぼけてるの将君、三人目は将君だよ？」

「あ？」

何を言ってるのかねこの子は？ 今日是一日中寝るといふ推考な計画があるのだ、そんなものに付き合うほど暇ではない。

「まさかとは思いますが、お兄様、約束を忘れていますか？」

「約束？」

「そんなのあったか……？」

「ほら、将君。この前のレッドファイトの時だよ」

……思考中

「あ……………」

凜に言われて、ようやく思い出す事ができた。

そういえばそんなこともあったな。最近色々なことに巻き込まれてゴタゴタしてたから、忘れていても無理はない。

「思い出しましたか？」

「ああ、確かデート……………だったよな？」

「はい！」

将の言葉に、二人が満面の笑みを作って返事をする。

が、さっきも言ったが、最近ずっとゴタゴタして忙しかったため、体が疲れている。そんな体でこの二人と出かける……………考えただけでも疲れてきた。

「なあ、悪いんだけど今日は……………」

「却下」

「拒否」

「疲れてるから、って否定すんのはええよ……………」

将の案は提示される前に否定されてしまった。

せめて全部言わせてくれよ。

「今日はずっとベッドの中にいたかったんだけど」

はあ、と溜息をつきながらぼやくと、それを聞いた二人が予想外なことを口にする。

「私はお兄様がそう望むならそれで構いません」

「私も、将君がそうしたなら今日は我慢するよ」

それを聞いた将は、

「え？ マジで？」と素で驚いた表情を作る。

どういうことだ？ さっきはあれだけ最速に断っておいて、今度はOKとは……まあいいか、とりあえず今日はずっと寝れることになったんだ、素直に喜ぼう。

将は細かいことを考えるのをやめた。

「悪いな、二人共」

二人に感謝を述べながら、ふかふかの掛け布団を被り、

「いいですよ、ただ」

「初めてが3Pなんて」

「さ！ どこ行くか」

すぐに払いのけた。

危ない危ない、こいつらに掛かれば俺の貞操なんてあっという間にもっていかれてしまう。

気を引き締めるため、将は顔を両手で叩いて目を覚まさせる。

「んで、今日はどっか行きたいところとかあるのか？」

本当は一日寝ていたかったけど、自分で撒いた種だ、今回は仕方がないので付き合っただけでやるとしよう。まだ貞操は失いたくないし。

「私はお兄様とならどこでもいいんですか……」

「私も特には……」

「ふうん、まあいいや、俺着替えるから、その間に下で二人でどこ行くか決めといてくれ」

二人は互いの顔を睨むと、「わかりました」といって一緒に部屋を後にする。

あの調子なら行き先が決まるのに1時間くらい掛かりそうだな、まあでも一応服は着替えておくか。

将はもう一度大きな欠伸をすると布団から出た。すると机の上の服が一式綺麗に置かれていた。間違いなくあの二人の仕業だろうが、自分で服を選ぶ手間が省けたので、大人しくそれに着替えておくことにしよう。

持つていくものは、ハンカチ、ティッシュ、携帯に財布、これくらいか。そういえば財布の中身、今やばいんだっけか？

思い出した将は、ポケットにしまった長財布を開けて中を確認してみると、諭吉が一枚と、小銭が少量。

これじゃあ心もとないな。あとで諭吉さんを増幅させておこう。

普通に遊びにいくならこのままでも十分だが、相手はなにせあの二人だ。どうなるかわかったものではない。

そうなるととりあえず銀行かコンビニだな、と考えた将は部屋を出た。

瞬間

ガシッ

「さあ、行きましようお兄様」

「え？」

ガシッ

「行こう、将君」

「え？」

なぜか待ち伏せていた二人につかまり、そのままずると玄関まで引つ張られる。

「ま、待て待て！ どこいくのか決まったのか？」

「はい」「うん」

返事をしながらも二人は引つ張るのをやめない。

将の予想ではもっと時間がかかる予定だったんだが、どうやら違
ったようだ。

「わかったから！ せめてどこに行くのか教えてくれ！」

二人に引つ張られ、転ばないように注意しながら将が説明を求め
ると、二人は尚も将の腕を引つ張りながら、綺麗に声をはもらせ、言
った。

「デパート！」

震・ヤンでれ…土曜の朝…（後書き）

皆様おひさしぶりです。さて今回は本編に戻りました。

特別編の温泉編は、お気に入り数が50人増えることに公開しているかと思えます（ふふふ）

さて今回は読者の方に3つ報告があります。

1つ

これから活動報告をなるべく毎日更新していこうかと思えます。まあ更新などの報告を含めて

2つ

新人賞に出そうと思っている作品を、検索除外で投稿しようと思えます、読んでみたいという方はURLを載せておきますので、感想をいただければ幸いです。

URL <http://ncode.syosetu.com/n3376x/>

3つ

この作品、またはヤンでれFの表紙、挿絵を募集したいと思います（願望）。友人が書いてもらっているのを見て、すごく羨ましかったのと、キャラが想像しやすいためです。

震・ヤンでれ…映画…

というわけで有無を言わず連れてこられたのは、普段から何かとお世話になっている駅前のデパート、永杉屋。

「んで？ なぜにデパート？」

「？ 何か不満でもありますか？」

右腕に張り付いた静香が上目使いで言う。

「いや、別に不満があるわけではないんだが……」

同じく左手に張り付いた凜が言う

「ならいいじゃないですか」

確かに、これが本当に彼女らの望むデートなら文句は言わない、
が、将は納得していなかった。

本当にこれが、あの二人の望むデートなのだろうか？

まあ正直デートをしたことがないため、将にもあまりわからない
のだが、デートと言えば、遊園地とか水族館とか、そういうところ
を想像していた。

普段からいつているデパートなんてこいつらが考えたにしては生
優しすぎる気がしてならないんだが……気のせいだろうか……

疑いの眼差しで二人を見る将。

「? どうしましたお兄様? そんなにじつと見て……心配しなくてもファーストキスはお兄様のために取っておいてますよ?」

「もちろん私も」

即効で勘違いする二人。

「お前らの考えてることは永遠に読めない気がするよ……」

「?」

「まあいい、ところでこれからどうするんだ?」

といつてもデパートに来たんだから、何か見て周るんだろうが、

とりあえず三人はエレベーターの隣にある大きな店内図へと来ていた。

「お兄様が決めてくれて構いませんよ?」

「そうだね、せっかくのデートなんだから、男の人にエスコートしてもらいたいな」

なんのためにここにつれてきたんだよ。と文句を言ってやりたくなったが。デートで男が女にエスコートされているのは一里あるの
で、仕方なく地図を見て将は考える。

女の子が行きたそうな場所か……やっぱり洋服とかだろうか?

個人的は本屋もありだと思っけど……

と、そこまで考えたところで、将は体がちりちりと焼けるような感覚を感じた。

なんだ？ と周りに視線をやると、その原因はすぐにわかった。

『なんだあいつ？ あんな可愛い子二人に二股か？』

『見せつけやがって』

『リア充溺死しろ』

男達の嫉妬や憎悪の視線が、いつの間にか将達を囲むように出来上がっていた。

まあそりゃあそうだな。こんなアイドル顔負けの女の子を二人もはべこらせていたら、そういう視線になって当然だろう。

さっさと移動したほうが良さそうだな。こいつらの怒りがいつ爆発するかわからないし、それに

「お兄様？ 安心してください、いつでも殺れます」

「私もOKだよ」

こいつらに動かれたらまずい。なんかもう笑顔の裏にドス黒い何かを感じずにはられない。

「俺は全然OKじゃないよ」

将はそう言って、その場から逃げるように開かれたエレベーターへ駆け込んだ。もちろん腕に付いている二人も連れて、

「なんだ、殺らないんですか……」

「ちょっと残念……」

「冗談も対外にしといてくれ」

「……？」

二人が顔を見合わせて目をパチクリさせる。

「頼むから冗談だといってくれよ……」

十中八九冗談じゃないんだろうけどな……

将は何か諦めの溜息を吐いて、8階のボタンを押す。

「あ、最初の目的地は映画館ですか？」

「ああ」

というかぶつちやけどドラマやらアニメとかで、デートは大抵映画館と相場は決まってるみたいだから、無難な線を選んだわけだが、

「嫌だったか？」

「いいえ全然、私に異論はないよ。将君」

「もちろん私も大丈夫です」

「そうか、よかった」

キーン、八階です。という機械音と共に、エレベーターの扉が開かれた。

フロアに入ると、柱や壁に様々な上映中の映画が並べられており、映画グッズの販売所なども設けられていた。

休みだと言うこともあつてか、家族連れやカップルで来ているのがほとんどのようだ、まあ一人で映画っていうのもあまりピンこないが、

「それでお兄様、なんの映画を見るんですか？」

「え、ああいや、そこまでは決めてなかったんだけど」

「まあ、そんなことだろうと思っていただけ、じゃあ今決めちゃおう」

「そうだな」

将達はなんの映画を見るか決めるため、フロアを見てまわることにした。

選択指？ アニメ

「とある聖騎士の白舞踊か……」

「内容はファンタジーでしょうか？」

「有名な小説の映画化みたいだね」

見た感じは静香の言うとおりファンタジーっぽい。概要を見ると、裏舞台に入りこむ聖騎士の話みたいだが、先の展開が読めなくて中々楽しめそうだ。

だがこういうのはデートの時にみるものではない気がする。

「とりあえず保留ということだ」

というわけで次へ

選択指？ ホラー

「死滅……」

「たくさんの異形なゾンビ達が人間を食いつくしていくって……怖い系と言うよりグロい系っぽいですね」

「うーん」

二人が微妙っぽい顔をしているのをよそに、将は顔を青くして視線をポスターから外す。

実は将は昔からこの手の映画が大の苦手なのだ。理由は単純、怖いから。

だが男で幽霊が怖いなんてかつこ悪くて言えない、ここはそうそうに立ち去ろう。

「あ、あっちの映画はなんだ？」

将は自然を装いながら、柱に貼られている映画のポスターを指さす。それに乗っかるように静香と凜も将の指した方に興味を乗せる。

よかったなんとかバレずに済んだみたいだ。

選択指？ 恋愛

「山手線恋物語か」

「最近テレビでよく見る恋愛物ですね」

「カップルで見る映画NO1だった気がします」

二人の言うとおり、最近ニュースなどで見る恋愛映画だ。なんか賞も取ったみたいで話題の作品。

内容はよく知らないが、山手線が関係する映画なのはたぶん間違いないと思う。

「さてと、すぐに見れるのはこの3本か」

後はこの3本のどれを見るのか決めるだけだ。

とりあえずホラーだけは絶対に見ないと心に決める将であった。

震・ヤンでれ…映画…（後書き）

スマートフォン直ったーーーーー！！

これで戦コレできる！

というわけで喜びの更新です！ これからも活動報告をやるんでよかったら見てくださいな。

というか感想来るとマジでうれしくてやばす！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8482k/>

ヤンでれ...

2011年10月13日04時51分発行